
流星のロックマン 4 DualStar

海羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4DualStar

【Nコード】

N9213V

【作者名】

海羅

【あらすじ】

スバルたちは六年生になりいつもと変わらない生活が始まった
だがあるとき電波世界電腦世界で異変が起きた

突然変異したウイルス、200年前電腦世界で戦争を巻き起こした
二体の電腦竜

二人は電腦竜を使い再び世界を破滅しようとする組織と二体の封印
の鍵となるPGM争奪戦が今始まる！！

流星サーバーtoアクセス

星河スバル・・・小学六年生三度にわたる、世界危機から相棒のウォーロックと仲間達と協力して地球を救った英雄

ウォーロック・・・もとAM星人FM星出身現在はワイザードと呼ばれるスバルと電波変換してロックマンとなる

響ミソラ・・・国民的代表ミュージシャン。スバルと同じ六年生相棒のハープと電波変換してハープ・ノートになる スバルに恋心を抱いている

ハープ・・・ウォーロックと同じFM星人琴座 ミソラの姉のような存在

白金ルナ・・・小学六年生コダマ小学校の生徒会長であり、クラスの委員長の存在。ゴン太とキザマロを下に仕える。スバルに恋心を抱いているがミソラに少しリードされてしまう

牛島ゴン太・・・六年生。相棒オックスと電波変換してオックス・ファイヤになる

伊集院キザマロ・・・六年生。情報収集が得意。ゴン太とはいいコンビである

西蓮寺ハルト・・・コダマ小学校に転校してきた人物グローカーの

サイバードラゴン
電脳竜復活を阻止するため遊撃隊に選ばれた

相棒のスコルピと電波変換してスコルピオ・カイザーになる

スコルピオ・カイザー・・・氷属性 おおきな鎌を武器にして戦う 姿は蠍

スコルピ・・・アシッドと同じ人工電波生命体過去にアンドロメダに破壊されデータが飛んだが

大きな鎌を持っているWAXAが集め修復した

鳴無ミオ・・・ハルトの幼馴染 六年生 同じように遊撃隊に入る

相棒のアクアスと電波変換してアクアス・ネプチューンとなる

アクアス・・・スコルピと同じ人工電波生命体

アクアス・ネプチューン・・・水属性 トランペットを武器にして戦う

エクスプロージョン
鬼神化

・・・電腦竜の能力が入ったPGMがロックマンと融合するこれを「鬼神化」

（エクスプロージョン）という

デュアル・エクスプロージョン
流星鬼神化・・・

二体の電腦竜の能力を解放し融合した状態

強力な力を発揮するが負担が大きい

エクストロージョン
鬼神化形態

アルタイル・エース 鋭い爪を使い戦う

ユニバース・ジョーカー

サイバードラゴン
電腦竜

アルテレギオン・・・ 200年前電腦世界を混乱に陥れた最強のサイバーウイルス

ユニバサリオン・・・ 200年前電腦世界を混乱に陥れた最強のサイバーウイルス

その他

アルタイルPGM・・・紫のPGMとエースPGMが融合したもの

ユニバースPGM・・・黄色のPGMとジョーカーPGMが融合したもの 未登場

メタモルフォーゼ
変幻能力・・・周りの電波に合わせ姿を変える キズナ というPGMである

サイバードラゴン
アヒリタイプブレイク
能力破壊・・・グローカーが電脳竜

を復活させるために必要なPGM 電波変換、ウィザードの能力は破壊する

ソウルブレイク
精神破壊・・・相手の心を闇に覆う能力

ウェーブブレイク
電波破壊・・・電子機器や電脳世界電波世界に電波の障害を起す

キズナ・・・二つのPGMを制御するPGM

キズナ・・・
メタモルフォーゼ
変幻能力を発動させるためのPGM

サイバードラゴン
電脳竜の核的存在なものがこの上に載っているものです

いちおう本編とはかわらない部分や全く違うことが起きるかもしれないので

指摘などお願いします

世界を救った英雄

宇宙人による地球侵略、Drオリヒメによる古代帝国ムーの復活、ノイズ流星メテオGの落下

この三度にわたる、世界危機。とめた人物はかつて人と関われない人が勇気を出してとめた

その名は「星河スバル」そして彼に勇気を与えた電波生命体「ウォーロック」

この二人はどんな局面に立とうと仲間と自分を信じ敵と戦ってきた

それにより世界の人々は「奇跡の青い流星」と呼ぶようになった

今は平和な時代。スバルとウォーロック、そして、仲間達はいつもと同じ平穏な日々を過ごしていた

彼らは今日から小学校六年生新たな出会いが始まると共に新たな戦いも始まる

鬼神化

エクスクローション

鬼神化の追加・・・というより

新たに思い浮かんだ能力等です

アルタイル・エース

氷属性 恐竜の姿をしたロックマン

背中に電波を帯びた翼を持っており

空中を自由に飛び回る

腕に鋭い爪を持っており

氷の衝撃波を出すこともできる

ドラゴノイドビックバン

D N B 必殺技の名前です

はダブルブリザード（デュアル・ロッド・ブリザード）

ユニバース・ジョーカー

雷属性 天竜の姿をしたロックマン

こちらにも背中に電波の翼を帯びており

空中を自由に飛びまわれる

腕に鋭い爪を持っており

雷の衝撃波を出すこともできる

ドラゴノイドビックバン
DNB 必殺技の名前です

はDLボルテッカー（デュアル・ロイド・ボルテッカー）

デュアルーツ・ナイト

無属性 白竜の姿をしたロックマン

背中に無数の剣の円を持っている

DNBはデュアルーツサークル

鬼神化（後書き）

かなり悩みました

起床と遅刻（前書き）

最近授業中小説を書いていますW
W
ばれないように
がんばってかきまーす

起床と遅刻

ジリリリリリリリリリリ

彼・星河スバルは、目を擦りながらベッドからおきた。

「ふあ~~~~、そういえば今日から六年生か。」

スバルはクローゼットから服を出し着替え始める

「ウォーロックいい加減起きてよ」

ウォーロックと呼ばれた人物は、今は普通のウィザードだが元はF
M星からやってきた

宇宙人である

「くんあ、俺なんて着替えもねえし、飯なんてくわねえから良いじゃ
ねえか」

「ふ~~~~ん、じゃあハンターから君を追いつて一人で学校に行
こうかな」

それとも委員長が怖いから来ないって嘘言っておけば良いか。」

「<さて今日からスバルは六年生か。」

（単純だなウォーロックは）

着替えを済ませリビングへ行った

食卓には既に朝食があつた

「おはよう母さん」

「おはようスバル。今日から六年生か。」

「うん。」

「大吾さん仕事帰ってこられないから、残念ね」

スバルの父はWAXAで宇宙調査員として働いている

「あら、もうこんな時間？スバル早く食べちゃいなさい。」

「ふぁーい」

パンを口に含んだまま答え牛乳で一気に流し込む

そこにニュースキャスターの声が届いた

『昨夜未明、WAXAがあるとある遺跡調査をしていたところ、ほこらに200年前の電腦世界

で二体の電腦竜サイバードラゴンが戦っていたことが分かりました」

「ふゝゝゝん、200年前っていうとまだウェーブロード通っていないんだよね？」

< くんな事俺が知るか。それよりスバル、新学期早々遅刻はまずいでしょ？ >

スバルはテレビに釘付けになっていて時間を忘れていた

「わああああ、やばい、母さんいつてきまーす。」

「気をつけてよー」

スバルは大慌てで家を飛び出した

グローカー本部

「それで、例の作戦はもう実行できるのか？」

暗闇の中椅子に座っている男が問いかけた

「はい。ですが、PGMのほうはまだ不完全ですが……多少の誤差があっても大丈夫です」

問いかけられた男が答えた

「構わん。使おうが使わないだろうがどの道あれは手に入るのだから……」

「分かりました。では実行に移ります。」

暗闇から男が消えた

「もうすこし、もうすこしで電脳竜^{サイバードラゴン}が我らの手に」

声は出さず男はフツと笑った

起床と遅刻（後書き）

むりしましたww

転校生は顔馴染み？（前書き）

つじつまがあってるかどうか分かりません！！

転校生は顔馴染み？

コダマ小学校の始業式が終わりスバルたちは教室へ帰るところ

「はあ~~~~、今日から六年生か。」

く何今更言ってるんだよ。おかげで俺はあの女が長時間喋っていた
せいで

体が伸びちまった。」

（あの女というと委員長のことだろう・・・あえて言わないけど）

ウォーロックが不機嫌な理由は、始業式、生徒代表の挨拶が生徒会
長である

委員長であつた。普通だったら2・3分で終わるはずだが委員長の
話は

30分も続いた。

おかげで今日入学した一年生は、ほとんど眠ってしまいスバルたち
もこの有様。

く帰ったら一暴れするか。>

「それだけは勘弁してくれ・・・。」

スバルは教室に入りながら言った

相変わらず6 - Aはほとんど変わっていない

変わったといえばジャックがWAXAに入り特別調査部隊に入ったとか

すると担任の育田先生が教室に入ってきた

「みんな～～～席着けー。」

先生の一言でざわついていた教室が静まり返った

「えー、今日は新しく転校生が来ている。みんな、顔や名前は知っているが

実際に見るのは初めての人が多いかもしれん。」

「だれなんだろう、転校生って。」

<さあ。>

「?どうしたの」

<いや、なんか変な感じがするんだよ。>

「変な感じって?」

<いやなんでもない>

ウォーロックがそう言いかけた瞬間教室のドアが開いた

「「「!!!!!!」」」

クラスの皆は硬直した

もちろんスバルでもある。なぜか？

それは転校生は誰でも知ってる人だからである

だがスバルたちはちがかった

共に地球の平和を守った仲間であるから

「今日からこの学校に転校してきた、響ミソラです。よろしくお願いします。」

クラスから歓声が上がった（主に男子）

「うお~~~~。本物の響ミソラだ~~~~。」

「サインほし~~~~」

静まり返っていたクラスが又ざわつき始めた

「ウォーロック、さっきの変な感じって、もしかしてハープのこ
と？」

ハープとはウォーロックと同じFM星人である

「いや、違う。もっと別な電波だ。」

「別な電波って……」

スバルがそう言いかけた瞬間クラスから妙に怖い視線が送られてきた

「な、何？なんでみんな僕の事見ているの？」

（なんか、視線がヤバイ……しかも委員長まで）

「じゃあ、星河、お前響の隣な。」

先生はそう告げ^{ホームルーム}HRの続きをした

「よろしくね。スバル君。」

「う、うん。こちらこそよろしく……」

スバルはいまいち状況がつかめず曖昧に答える

（まだ委員長の視線が……）

こうして僕達の新しい学校生活が始まった。

転校生は顔馴染み？（後書き）

長すぎだと自分は思っちゃいます・・・

異変電波（前書き）

前はちよつと文の構成がうまくいきませんでした

異変電波

「グローカー本部」

「ゼオル、作戦のほうはどういつてる？」

ゼオルと呼ばれた男は男に報告した

「はい、順調でございますミカル様。」

男・ミカルは小さくうなずいた

「たかがP G M捕獲のためども、そう警戒はいらないと思うがいちおう

レウンをつける。」

「了解。すぐに連絡します。」

ゼオルは暗闇の中から消えた

「W A X AにP G Mはわたさない。先祖のためにも……」

「コダマ小学校」

「ふ~~~~、さあて帰るかウォーロック。」

「学校ってこんなに長く行かなくなると疲れるもんなんだな。」

今日は午前中で授業が終了した。スバルたちはこれから家へ帰るところ
教室を出ようとすると誰かに声をかけられた

「まって、スバル君。」

スバルが声がした方向を向くとそこには今日コダマ小学校に転入し
てきた響ミソラであった

「なに？ミソラちゃん。」

スバルが聞くとミソラはもじもじしながら言った

「あ、えーっと……その……今日時間ある？」

「あるけど……」

スバルは不思議そうに首を傾げた

「じゃあこのあと、屋上に来てくれない？話したいことがあるんだ
けど。」

「別良いけど……」

「ほんとー！ありがと。じゃあ先行っててね。私先生に呼ばれてる
から」

そついうとミソラは駆け出していってしまった

「僕達も行くか。」

<めんどくせー>

スバルたちは屋上に続く階段を上った

だんだん屋上に近づいていくと突然ウォーロックがスバルの歩行をとめた

<待て、スバル 屋上から変な電波が発生している。>

「それって、朝言ってたことじゃない？あ、でもあれって結局ハープの電波じゃないの？」

<違う。ハープの電波も感じたが、それより強力な電波……

現代のものじゃない。>

<俺もよく知らない。けどそれが何なのか調べに行く。>

「分かった。」

スバルたちは屋上へ入っていった

人気も無く静かな場所になっている

「どこからその電波が感じるの？」

<今探してる>

ウォーロックが妙な電波を探していると突然屋上に誰かが来た

「!!」

入ってきたのはミソラだった

「ミソラちゃんか。」

「何私じゃ悪かった？まさか委員長がよかったんじゃ・・・」

<スバル、スプリンクラーだ!!>

「!!分かった。ミソラちゃん、ごめん急な用事ができて

又今度はなして。」

そついいスバルは駆け出していつてしまった

「あ・・・・・・」

ミソラはただ一人屋上に残された

<追いかけてなくて良いの？>

話してくれた相手はパートナーのハープである

「うん。だって急な用事って言ったし・・・私たちも帰るか？」

ミソラは屋上から出て行った

異変電波（後書き）

今日はここまでー！

愚痴後お泊り？（前書き）

最近途切れ途切れでつつかえます

愚痴後お泊り？

「もうなんなのよ、スバル君たら女の子の気持ちがわかんないんだから。」

ぼそぼそと呟いているのは響ミソラである

「だいたい、私が何のためにこの町に来たと思うのよ……」

ハアと溜息をつく

<おじおじしててもしょうがないでしょ。>

「そうね。まず今日泊まれる場所を探さなくちゃ。」

誰かに聞こうと歩みだしたとき

「あれ？もしかしてミソラちゃん？」

ファンの人かと思わず逃げようかと思ったが

声の人物はスバルの母・星河あかねであった。

スバルたちはウェーブステーションの前まで来た

「はあ、はあ、ウォーロック、そういえば思ったんだけど。」

<なんだよ。>

「いままで電腦の中にウイルスや電波体が入ったら、そのシステム化なんかが

暴走しなかったけ？」

<例えば？>

「あのスプリンクラー。変な電波を感じているんならウイルスかも
しれないじゃん

だったら、水をあちこちにぶちまけているじゃん。」

ウォーロックは考え込む

<そうだよな。俺達の経験上大体ウイルスが入ったら

電腦機器が暴走するのは当たり前だった・・・>

「考えていても仕方が無い。電波変換しよう。」

<よし、久しぶりに暴れるか！！>

スバルはハンターV Gを掲げいつもの言葉を叫んだ

「トランスコード003、シューティングスターロックマン！！」

スバルたちはウェーブステーションからウェーブロードへと繋がる
軌道を

通った

<なんか、変わらないな。>

「確かに・・・でもなんか変な違和感がある」

<久しぶりの電波変換だし鈍ってるだろうよ。急ぐぜ!!->

「うん!!-」

~~~~~ミソラ@コダマタウン~~~~~

ミソラの愚痴がスバルの母には聞こえていたらしく

しょうがなく事情を説明した

「そう。そんなことが。」

あかねが心配そうに言う

「でもスバルもスバルよね。話がある女の子を見捨てて、どっかいくなんて。」

「私がいけないんです、急に呼び止めたから・・・。」

下を俯きながらミソラは言った



（ほかもスバル君に告白しようとしたなんて、いえないし・・・

まあ困っているのは事実だし・・・）

「ミソラちゃん、もうこんな時間だし外うろつくと変な人に声かけられそうだから

今日うちに泊まってきなよ。」

あかねはにつこりと微笑んだ

「え、でもせつかくの家族団欒を邪魔しちゃいけないし・・・」

「遠慮しなくてたつて良いよ。何ならずと家にいる？」

ミソラちゃん一人暮らしなんですよ？」

「え・・・」

ミソラは驚いた

（なんでスバル君のお母さんが私が両親いないこと知ってるの）

「スバルから全部聞いたわよ。初めてブラザーになったっていうこと

両親がいなくて寂しい思いをしていたこと。

スバルも自分でもなんかできないかな〜って言っていたよ。」

耳に入っていないが心に入っていた

人を信じる・・・・・・・・

「はい。・・・・・・よろしくお願いします!!」

「にしてもスバルったらよほどミソラちゃんのが好きなのね。」

「え、」

ミソラの頬が突然赤くなった

「じゃあスバルが帰ってくるまで部屋で休んでいてお夕飯の用意するから」

われに返ったミソラは自分でも何か出来ないかと聞く

「あの、私もお手伝いしたいです。何か出来ることはありませんか？」

「わかった。じゃあその食器出して」

こうしてミソラの新しい生活が始まった

愚痴後お泊り？（後書き）

今回はミソラの話・・・不定期でこんなやつてすみません

次回はウィルスバスターングです

## 雑音（ノイズ）

ウェーブロードをまっすぐ進んですぐに、スプリンクラーの電脳へと続く

アクセスサーバーがあった

「いくよ、ウォーロック。」

<スバル、先に言うておくが結構ヤバイ電波がこの先から発している。十分警戒しろ>

「分かった。」

そしてスバルは電脳へと入っていった

メテオGの事件から電脳世界へ入っていなくても違和感があるのは変わない

電波の発信先を探すとスバルがあるものを見つけた

「ん？あれは・・・」

スバルは中央の広い場所へ行った

<こいつらか。>

「でも見たことあるウイルスだけど様子がおかしい。」

スバルたちが見たウイルスは背中に翼が生えていて

尻尾を帯びており原型がメットリオである

<なんか、厄介者だな。とつと片付けるぞ>

「バトルカード、プラズマガン!!」

発射された電撃はメットリオにあたり辺り一面煙が舞い上がっていた

「よしやったぞ。」

<いや待て、>

ウォーロックが上を見上げていた

同じくスバルも上を見上げるとそこには巨大化したメットリオであった

「なんでこんなに大きいんだ!!」

<オレにもわかんねえ。ただ妙な電波を発し続けていることには変わりねえ>

二人が話しているのを狙ったのかメットリオは尻尾でスバルを吹き飛ばした

「うあああああああああああああ!!」

<スバル!!おい、おきろよ、おい!!>

メットールがだんだん近づいてくる

<くそ、こいつらなんなんだよ。ただの電波ウイルスじゃない>

ウォーロックは強制ウェーブアウトした

現実世界へ戻ってきたスバルはウォーロックの応急処置で

なんとか傷を治すことは出来た

<とんだ厄介やろうだ>

応急処置をしたスバルをウォーロックが眺めている

<こりゃひでえな。おふくろに見せられねえ。>

するとスバルの意識が戻った

「う、うゝゝゝん」

<スバル？目を覚ましたか>

「ん、んん？ウォーロック？僕さっきまで電脳世界にいてウイルスと戦っていて、

そっから・・・」

<ご覧の有様、ウイルスにやられたよ>

「そうか・・・でもあのウイルスなんだったの？」

<さあ俺にもわからねえ>

するとスバルのハンターで電話着信音が響いた

「だれからだろう」

ウィンドウを開くとそこにはWAXAのヨイリー博士が映った

『おひさしぶりね、スバルちゃん、ウォーロックちゃん』

雑音（ノイズ）（後書き）

結構疲れます



200年前

「ヨイリー博士！！どうしたんですか？」

『いや、ちょっと変な電波をうちのコンピューターがキャッチしたから』

追跡したらここだったのよ。』

「実は僕達も妙な電波をキャッチしたんです。」

ヨイリー博士はほほうと頷く

『そうか、じゃあせっかくだから変なウイルスのことについても教えてあげるよ。』

ヨイリー博士はまるで全部見ていたかのような口調で話した

それに対してスバルたちはちょっと動揺した

「なぜ、僕達がウイルスに襲われたのを知っているんですか？」

『まあ、知るのはいち早くからね？』

「………わかりました」

スバルたちはWAXAへと向かった

久しぶりに見たWAXAはいつもと変わらない雰囲気を出している  
ウェーブライナーから降りたスバルたちは新たに建てられた  
建築物に目を引いてる

<おい、スバル見てみるあそこにウィザードが飛んでるぞ。>

「ほんとだ。最近のWAXAも進化しているな〜」

入り口の門をくぐりWAXAへと入っていった

「中は大して変わらないね。」

<だな。それじゃ婆さんの所へ行こうぜ。>

「WAXAの研究所は確か・・・あっちか」

近くにある案内板で研究所がどこにあるか確認して

大きな門をまたぐった

「ヨイリー博士。」

「あら、スバルちゃん。よくきたね。」

<久しぶりだな、ばあさん。>

「ウォーロックちゃんも元気そうで。」

「それより博士、先ほど言ってた電波はなんなんですか？」

「そうだ、あの電波でウイルスが突然変異して、スバルはこの様だ。」

「まあ、あわてなさんな。」

ヨイリー博士は多く息を吐いてから言った

「あの電波はね、現代の電子機器が発している電波じゃない。」

古代の電波なのよ。」

＜「古代の電波？」＞

スバルとウォーロックの声が揃った

二人は古代の電波ということに驚いているだろう

「その古代の電波とは・・・」

スバルが恐る恐る聞く

「まあ古代って言っても2000年前のだけだね。」

＜何でその昔の電波がこの世の中に・・・＞

「スバルちゃん、今朝のニュース見た？」

「はい、見ましたけど……」

「WAXAが何か見つけたというニュースは見た？」

（今朝のニュース……たしかWAXAが遺跡で2000年前の  
電脳……ん？）

スバルは考え込みあることに気がつく

「もしかして、あの電波の発信源は……」

「そのまさかだよ。」

ふと階段から誰かの声がした

## 200年前（後書き）

最近ミソラの出番がありません  
委員長も・・・そろそろださなきやまずいですね

## 電腦竜（サイバードラゴン）（前書き）

最近PCやる時間がありません・・・

## 電腦竜（サイバードラゴン）

「曉さん!!」

階段から聞こえてきた声の主はサテラポリスのエース

暁シドウであった

「久しぶりだね、スバル君、ウォーロック。」

<久しぶりなのはいいけどよ、その電波の発信源ってなんだ？>

「そうそう、」

シドウは一つ息をはいてから言った

「あの電波は、2000年前電腦世界で暴れた二頭の電腦竜サイバードラゴンの電波だ。」

「

その言葉にスバルとウォーロックは目を点にした

「え？電腦竜サイバードラゴンって今朝ニュースでやってた奴ですよ？」

シドウとヨイリーはこくんとうなずいた

<まじかよ。>

「遺跡を調査していたら、かなり危険な電波を発していた。」

「私達が、その遺跡を調べていたら一部のPGMと電波が外部に飛んでいる。」

ヨイリーがシドウに続いて言う

「外部に飛んでいるって・・・それって電子機器や人間に害は無いんですか？」

スバルが恐る恐る聞く

「いまのところ電子機器には支障が出ない。でも、外部に飛んだPGMは電波変換した

人間と融合してある姿になるとウィザードや電波変換した人の

能力や形態を破壊したりするらしい」

<そのある姿ってなんだ？>

「それは分からない。でもスバルちゃんたちがもしそのPGMと融合したら

間違いなく暴走する。」

「暴走・・・・・・・・」

「だがエースPGMを持っているスバル君にはPGMは融合できない」

そういつてきたのはシドウであった



「そ、そうですね」

スバルがほっとため息をつく

「そこでだ、スバル君にお願いしたいことがある。」

「なんですか？」

「実は、そのPGMがある場所に今から行ってほしいんだ。」

「ええ!？」

<おい待てよ、スバルは今怪我をしているんだ、行かせたらそれどころ暴走する。>

「……そうか。実は僕もその場所に行ってきたら、ウイルスにやられた。」

「ウイルスって翼や尻尾は生えているあれですか？」

「ああ、そうだ。……そうかスバル君が怪我をしているなら仕方が無い」

又今度の機会に連絡する。」

そついいシドゥは研究室を出て行った

「ということね。気をつけてね。スバルちゃん。」

「わかりました。」

スバルたちはWAXAを出て行った

## 良い子は帰る時間

スバルたちはWAXAを出てウェーブライナーを待っていた  
すると突然ハンターから電話が来た

「ん？誰からだろう。」

ハンターを取り出し画面を開いた

「はい、もしも……」

『おつそ～～～～～～～～い！！』

電話をかけてきたのは響ミソラであった

突然の怒号にウォーロックは耳をふさいでいる

「ど、どうしたのミソラちゃん。そんな大きな声だして。」

『どうしたの？じゃないわよ。今何時だと思ってるの？7時だよ！！』

良い子は帰ってくる時間だよ！！』

<あ～～～～耳が～～～～>

（ウォーロックごめん流石にそれだけは助けられない・・・）

「でも、なんでミソラちゃんが僕がどこかへ出かけているって分か

ったの？」

『ふ~~~~ん、スバル君数時間前の会話も忘れたんだ~~~~』

だれが大切な話があるっていう乙女にたいして、用事があるから又今度って言う

人がいるのかな~~~~』

話の内容に一目瞭然

スバルはぎぐつと来た

もちろんこれは起爆剤に過ぎない

「えっと~~~~だねこれはその~~~~つまり~~~~」

うまく事情が説明できないスバル~~~~

『私より用事のほうが大切かな~~~~』

(やばい~~~~)

ミソラは怒ると委員長と同じくらいに暴れだす

止められるのは誰もいない

スバルはあまり興奮させないように息を吐き出し言った

「ご・ごめん。どうしても外せなかったんだ。で~~~~」

今ミソラちゃんどこにいるの？」

あまり興奮させないようにと心で念じたつもりが返って逆効果になった

『ふん。こっちは今スバル君の家にいるから。』

「へ？」

『じゃあ、夕飯できるからなるべく早く戻るようにつておば様が言  
つてたよ』

そついうと会話が途絶えた

「理不尽すぎる……」

<こりゃ、後で何言われるかわからねえぞ>

「母さんまでいるのか……厄介だな」

そしてスバルはあることに気づく

「ってかなんでミソラちゃんが家にいるの？」

<そりゃ、スバルが話し聞かなかっただからよ。>

「関係あるの？」

<まあ、どの道家に帰らなきゃならないんだし>

「なんか納得できない・・・」

スバルは肩を落としながら丁度来たウェーブライナーに乗った

ディナー？

スバルが家に帰ると待ち受けていたのはやはり母のあかねとミソラであつた

「えらい遅かつたわね、スバル？」

あかねは顔が笑っているが口調が違う

ミソラもなぜか不機嫌そうな顔をしているが笑っている

（なんかやばいぞこの空気・・・）

「さあ、スバル君夕飯にしましょう。」

（夕飯にしようって・・・）

少しためらいがたい顔をするスバル。それに気づいたミソラは指摘しはじめる

「何その顔？私が作った料理は食べたくないと言う顔ね？」

不満気な顔で聞いてくるミソラ

なぜかその横ではあかねが微笑んでる

「いや別にそういうわけじゃなくて・・・」

事情を説明しようとするスバルだがそんなこともミソラの気迫で消

されてしまう

「なにが、そういうわけじゃないのよ？」

さらに追求してくるミソラ

だがそこにあかねが入り込んできた

「まあまあ、こんなところで立ち話をしているとせっかく作った夕飯が冷めちゃうよ。」

とりあえず中に入りましょう。」

あかねの一言で一時休戦かと思いきや

スバルの説教は食事中も続いた

あかねの冷やかしと共に……



## 理由（前書き）

なぜか父が千葉へ単身赴任してしまいます  
そのためPCが仕えません  
しばらくお休みするかもしれません

## 理由

夕食を済ませスバルは部屋へと戻っていった。ミソラは現在入浴中  
くいやゝゝゝ、あの二人すんごい顔していたな。>

夕食中、スバルはあかねとミソラに説教やら質問などされた

お説教はともかくあかねの質問にはスバルはあきれた

「二人は正式に付き合っているの？」や「デートとかした？」など  
誤解されるようなことしか聞かれない

スバルは答えようにも答えられなかったがミソラは「ええ、まあ。」

「そうでもないです。」などしっかりと答えている

「大体、僕たちはまだ正式に付き合っていないのに。」

<でもお互い好きなんだろう？>

「う．．．．．」

どうやら図星のようだ

お互い好きという気持ちがなかなか伝えられない

「だって、ミソラちゃんは芸能界ではいつもトップに立っているミ

ユージシャン

それに比べて僕は、素顔を隠している世界の英雄。」

くん、まあそんなぐらゐの差があればな>

ウォーロックも多少も納得しているようだ

すると突然部屋のドアノブがガチャリと鳴り中からミソラが入ってきた

「ミ、ミソラちゃん？」

「お風呂空いたから入ってきて良いよ。」

「わ、分かった。」

そしてスバルは部屋を出て行った

二人の会話を見たウォーロックは<進歩してねえ>ため息をつきながらスバルと

共に部屋を出た

一人残されたミソラはハーブに話しかけた

「今、スバル君私のことすきって言ったよね？」

<さあどうだろう。>

ハーブは知っているのか知らないのか分からない答えが返ってきた

「はあ~~~~~、スバル君来るまで何してよ。」

ミソラは立ち上がり本棚へと向かった

<ミソラ、あんたプライベートって言う言葉を知らないの？>

ハーブが呆れ顔で聞く

「だって男の子の部屋に入るの初めてだし、どんなものがあるかなーって思ったから。」

やはり知らないと確信したハーブは<もう良いと>と顔をなだめる

「スバル君って宇宙の本しかないんだ。」

<悪いけど私もうねるわ。>

ミソラの行動についていけないハーブはハンターへと戻った

## 理由その2

部屋から出たスバルはすぐに風呂に入った湯船につかりながらいろいろなことを

ぼやきはじめた

「はぁー！ー！ー、絶対さっきの話ミソラちゃんにきかれた。」

スバルの声が浴室全体に響く

<地球人ってのはわからねえ。両思い出何が嬉しいんだ？>

ウォーロックは扉を潜り抜けながら入ってきた

「てか、なんでミソラちゃん家に着たんだろ？」

そう考え込んだスバルは頭まで湯につかった

「ぶはぁ！！！！」

<悩んでいても仕方ないって言う顔だな。>

スバルは天井を見つめたまま答えようとはしない

<じゃあ、俺は一足先に上がるわ。>

ウォーロックは浴室から出て行った

「悩んでいても．．．．．か。」

スバルの独り言は嫌のように響いた

## 理由その2（後書き）

今回は短めです

## 訳

風呂から上がったスバルは二階へと向かった

自分の部屋に入るとミソラが愛用の音楽プレイヤーにイヤホンを繋ぎ音楽を聴いていた

「あ、スバル君。」

ミソラがスバルの顔を見たそれに対してスバルは頬を少し染めた

「どうしたの？少し顔が赤いよ？」

気づかれたスバルはちょっとしたのぼせたといって誤魔化した

「それにしても、スバル君の部屋って宇宙の本ばかりだね。」

<宇宙オタクだからな。>

ウォーロクが変な冗談を入れるがスバルは敢えて無視する

「父さんが宇宙飛行士だったからその影響かな？」

二人は会話が弾みクスツと笑った

「ねえ、スバル君？」

「何？」



「私がコダマ小学校に転校して来た理由とスバル君ちにいる理由聞きたい?」

突然話題を変えられビクツとする

「聞きたくない?」

答えるのに多少が戸惑ったが迷った挙句うなずいた

「うん。」

「じゃあコダマ小学校に來た理由は……」

ミソラが話し出した

ミソラがコダマタウンに來た理由は先日ミソラの街に原因不明の電波が大量発生し

電子機器などが使用不能になってしまった

丁度そのころ仕事をしていたミソラはそのことを聞くとすぐさまコダマタウンに引越した

だが引越したのは良いもののミソラが引越したと知ったファンは毎日ミソラの家の

押しかけていた仕事も出来ないミソラは芸能活動を一時休止した

学校に行くにも行けなくて今日わざわざ電波変換したらしい

<それで、スバルに相談しよう・・・>

「けど、僕が突然用事があるって言ってどこかへ行っちゃったと。」

「そうよ、ほかに大事なことを言おうとしたのに・・・」

「？なんか言った？」

「ううん。なんでもない。」

<で、相談相手がどつかへいったから町をぶらぶらしていたらおふくろに捕まったと。>

ウォーロックが続けた

「そついうこと。」

ミソラが首を縦に振った

「なんか行き当たりばったり・・・」

深々とため息をつくスバル

<さて、俺はそろそろ寝るとするか。>

「え？もう寝ちゃうの？」

大きく伸びをしたウォーロックにスバルが問いかけた

<もう寝ちゃうのって、10時半くらいだぞ？>

たしかに小学校六年生にしては10時半は遅い

「じゃあ、私も寝るね。」

ウォーロックにつれて寝ようとするミソラ

だがスバルはあることに気づいた

「ところでミソラちゃん、今日はどこで寝るの?」

「スバル君家。」

眠たそうな目を擦りながら言った

「いやいや、それは分かっているよ。でも僕んちのどこで寝るの?」

「スバル君の部屋。」

今度はあくびをしながらこたえた

「この部屋でどうやって?」

「スバル君のベッド。」

なんとも予想外の答えが返ってきた

それに対しスバルはかなりあわてている

「え、……僕のベッドで寝るの?……じゃ、じゃあ僕は床

で寝ろと。」

「すある君も一緒に・・・」

寝言を言っているかのように言っている

するとミソラはスバルのベッドの上でこてんと寝てしまった

「え？ちよつとミソラちゃん？寝ちゃったの？ねえ？」

スバルが声をかけるがミソラはピクリとも動かない

「いいじゃなええか、そのまま寝かせれば。」

「じゃあ、僕はどこで寝れば良いの？」

「ベッドで寝れば良いじゃねえか。」

「ええ！！！」

ウォーロックの意外な答えにスバルは慌てるのも当然のこと

国民的代表ミュージシャンがただの小学生と同じベッドで寝るなど

日本全国民が許すはずがない

「だいたい、男女一緒に寝られると思うの？」

「さあ？」

全く知らないという答え

「もういいよ、僕は今日、床で寝るから。」

そついい毛布を用意するスバルだがウォーロックはとめない

<別に俺は止めないぜ。でもそんなところで寝たら明日のお前がやばいぞ。>

ウォーロックが言っている意味は大体分かった

スバルは考えただけでゾクツとする

<だから今日はミソラの所で寝る。>

「・・・・・・・・分かったよ。」

これ以上言っても無駄というような顔でスバルはベッドへ上った

そしてスバルはこの晩ミソラの寝返りを回避しながらも寝られずにいた

## 誤解（前書き）

タイトルと内容が一致してません

## 誤解

ミソラの寝返りを必死で回避していたスバルが起きると時刻は7時であつた

真つ先に視界に入つたのはミソラの寝顔であつた

「・・・・・・・・なんか、かわいいな。」

ミソラの寝顔にどっぷりはまってしまったスバル。

すると背後から突然声がした

くつたく人間の趣味は未だに理解できない。」

「なんだよ、寝顔を見ていると変な人と思うのか？」

く人によるもの。>

（予想をはるかに越えた適当な理由・・・・）

ウォーロックは時計に目をやった

くそれより、そろそろ起したほうが良いだろ。」

「そうだね・・・・・・・・でもどうやって起せば良いんだ？」

く揺さぶって起す。>

「それもあるけど、せつかく気持ちよく寝ているのに揺さぶったら悪いよ。」

<じゃあ、キスすれば良いじゃない。>

背後から又違う声が聞こえた

それはハープであつた

「な、何を出たらめいつてるんだ？未だ小学生だよ？」

<<提案してるだけなのになんでこうむきになるんだ？>>

「普通に起すから良いよ。」

スバルは照れくさそうに言った

下へ降りると食卓にはもう既に朝ごはんが並んでいた

「二人ともおはよう。」

「おはよう。」

「おはようございます。」

やっとのことでミソラを起こしたスバル

未だ半寝状態である



「二人とも朝から仲良いね。」

あかねがにこつと笑い出す

その瞬間スバルは口に含んでいた牛乳をふきだした

「あ……朝から何言ってるの!!母さん!!」

するとスバルの背後からはニュースキャスターの声が聞こえ昨日の話題が広がった

『昨日未明、ドレットタウンで原因不明の電波が撒き散らされ周辺の電子機器が全て

使用不能になり……』

「あ、ここ私がいた街だ。」

ニュースを見ていたミソラが言った

するとスバルはニュースの内容にふとあることに気づく

「ねえ、ウォーロック。」

<あ?>

「昨日シドウさんたちが言っていたけどあの古代の電波は電子機器に障害をもたらさない

って言っていたよね？」

「確か、そんなようなことを言っていたような……」

すると時計が7時半になった

「スバル君、時間になったから行こう。」

ミソラが誘うがスバルは一緒に登校してくると厄介になるので電波変換して

ウェーブロードを通るように言った

「じゃあ、僕達も行くか。」

スバルはミソラ達に続いてかばんを持ち家を出た

## 誤解（後書き）

なんか最近急いで書いたのでごちやごちやです  
次は委員長出てきます

## 任務（前書き）

一ヶ月間更新できないかもしれません

## 任務

学校へ着くと6 - Aの教室はざわついていた

その理由はミソラの周りに何人もの男子が話しかけていたからである

「ミソラちゃんって好きな男の子のタイプってある？」

「オススメの場所はある？」

（そういえばこの学校の男子約半数以上がミソラちゃんのファンだとか・・・）

<あれって女子から何かを上げようって言う、あれだろ？え〜〜  
つと>

「だあああああああああああ！！」

スバルはウォーロックがこれ以上口走らないようにとめた

「それはそうと、どうやったら席に入れば良いんだ・・・」

これはあきらかスバルに対しての妨害工作としか言いようが無い  
すると本を読んでいた委員長が突然立ち上がりスバルのほうへと歩  
み寄ってきた

「おはよう、星河君。」

「お、おはよう委員長。」

なんだか機嫌が少し悪そうな委員長

するとミソラの席に行きたむろしていた男子のところへいきなにより注意をしていた

そして男子は自分の席へと戻っていった

「おお、席にいけるように開けてくれたんだね。」

「べ、別に褒めなくて良いわよ。」

頬が赤い委員長

「じゃあ、僕授業の準備するから。」

「遅れないようにね。」

委員長と僕は席へと戻った

それからスバルは授業をきちんと受けた」

放課後、スバルはHRが終わるとすぐ帰りの用意をした

するとハンターから一通のメールが来た

ヨイリー博士からであった

『突然でゴメンネ。実はウェープライナーを二つ乗ったところにド

レットタウンって言う

街があってその山奥にある遺跡を調査してほしいの。

その遺跡には電腦竜のP G Mがあるのそれをとってきてほしいの。

あのP G Mを狙っている組織が実はあるからきをつけてね。』

<ドレットタウンって、今朝ニュースでやっていたよな。>

「うん。」

<どうする？行ってみるか。>

スバルはしばらく考え込んだ

「分かった行こう。」

結論を決め早速行こうと教室を出ようとした瞬間

「ちょっと待って。」

突然呼び止められたスバルは振り返った

すると背後にはミソラが立っていた

「どうしたの？ミソラちゃん。」

スバルはなにかあるんじゃないかって言う顔で聞いた

「だって、スバル君が私をおいて教室を出ようとするから。」

行動を読み取っているのかどうかも分からずスバルは適当な誤魔化しを入れた

「じ、実はサテラポリスに頼まれて、パトロールをしてほしいって言われたんだ。」

これなら大丈夫だろうと思ったのが後の祭り

ミソラはそんな簡単な嘘を見抜いてしまった

「ふ~~~~ん、じゃあドレットタウンに行くんだ。」

「う、」

勘付かれたのかスバルは硬直する

「もちろん、私も連れて行ってくれるよね？」

役者のような麗しい目で聞いてくるミソラ。

それに負けたスバルはしょうがなくこう答えた

「分かったよ……。」

「やった~~~~。」

ミソラは小さくガッツポーズした



< 全く、女って言うのはわからねえ。 >

そしてスバルたちはドレットタウンに向かった

## 実行

ドレットタウンで原因不明の電波が出た日

一人の少年はなにやら小型の機械を持ち街をぶらついている

「あゝあゝあ、なんでオレがこんなことしなきゃならないんだ。」

周りの人とぶつかるのも気にせずぶつぶつと言っている

「大体こういうのはゼオルがやるもんじゃねえか？」

ゼオルという名前が出てきたというところこの少年はグローカーの一員だ

「いいじゃねえか。どうせ暇だったんだしよ。退屈するより良いだろ？レウン。」

レウンという少年に話しかけているのは彼のウィザードゼグルだった

「第一、こんなところにあのPGMがあるんか？」

「それがしらねえから今探してんだろ。」

二人が言い合っていると機会が突然鳴り始めた

「なんだ？」

「くどつやら近くに例のPGMがあるらしいな。」

二人は音が強くなつていく方向へ行つた

すると着いた場所は山奥にある遺跡だった

「ここに例のP G Mがあるんか。」

<とりあえず行こうぜ。>

中に入り奥へ進んでいくと広い広間がありそこに二つのカードらしきものがある

「これか？」

<多分そうだ。>

レウンがP G Mに手を伸ばそうとした所をゼグルにとめられる

<まで、ボスは一つだけでいいって言つたはずだ。>

「そついえばそついつてたな。」

レウンは黄色いP G Mを取り遺跡を出た

このあと不安定になつた電波が事態を巻き起こし

スバルたちに被害を与える

## 実行（後書き）

グローカー久しぶりに出した気が・・・

## 暴走（前書き）

今日は鬼神化エクストロージョンが出来ます

## 暴走

ウェーブライナーを降りるとドレットタウンの町並みが見えた

だがそのドレットタウンは電子機器が機能していない今人が誰もいない

「なんか、二、三日来ていないのに変わっちゃった。」

ミソラがつぶやいた

「とにかくP G Mがある場所に行こう。」

<行くのは良いが、その例の遺跡から例の電波を発している。>

<確かに、なんかノイズと感じたこの無い電波が入り混じってる。>

ウォーロックとハープが言った

「それって危ないの？」

<ばあさんは、人間には害がないって言っていた。でもP G Mは電波変換している

奴と融合してしまうらしい。>

「それじゃあ、みんな気をつけていこう。」

スバルたちは遺跡の中へいった

遺跡の中は暗く何も見えない

「ドレットタウンの山奥にこんな場所があったなんて。」

ミソラはスバルの服を掴みながら言った

<ほんと、私も気づかなかったわ。>

「それにしても、この遺跡に書かれている絵って面白いよね。」

ミソラが見つけた絵にスバルに反応する

「ほんとだ。ん？この絵なんかに似てるな？」

どれどれとミソラが覗き込む

見てみるとロックマンに似た絵であつた

<なんか、ロックマンに似てるな。>

ウォーロックが首をかしげた

そしてスバルたちは奥へと進んでいった

<ここにP G Mがあるんだね。>

スバルたちはP G Mがある広い間にいった

「これか。」

スバルは中央にある紫のPGMに手を伸ばした

<まあそれはいいから早くとって、おさらばしようぜ。>

そしてPGMを取り遺跡を出ようとした瞬間遺跡の中がゴゴゴゴゴと音がした

「なに？」

全員が辺りを回すと遺跡内が揺れ始めた

すると入り口付近に昨日スバルたちと戦ったウイルスであった

<こいつら昨日のー！！>

<なに？こいつらー！！普通じゃないわよ。>

<ごちゃごちゃ言っなー！！電波変換だー！！>

「分かった。トランスコードー！！シューティングスターロックマンー！！」

「ハープ・ノートー！！」

二人はウイルスに立ち向かった

「バトルカード、エアスプレッドー！！」



「ショックノート!!」

二人の攻撃はウイルスに直撃したが傷一つ付いていない

「このウイルス半端じゃないわね。」

<二人相手でも勝てないなんて・・・>

そしてウイルスは尻尾を使い攻撃した

「うああああああああああああああ!!」

二人は吹き飛ばされた

<<、これじゃ歯が立たない。スバル!! エースPGMを起動するんだ。>

「分かった。」

ロックマンはエースPGMを起動した

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

周りの電波がロックマンに集中していく

だが次の瞬間

「う、ぐああああああああああああああああああ!!」

<どうした？スバル。>

「スバル君！！」

そしてまばゆい光が走った

ミソラ達が目を開けるとロックマンはブラックエースに変身してはいなく

別の姿になっていた

<まさか・・・・・・・・融合したのか？>

## 暴走（後書き）

どんな鬼神体でしょう

## 暴走流星（前書き）

鬼神化のページを変えました

## 暴走流星

ファイナライズをしたロックマンは本来ブラックエースかレッドジョーカーのはずだが

今のロックマンはそのどちらでもない全く別の姿であった

<何が・・・どうなっているんだ？>

ウォーロックたちが見たものは紫色の装甲をまとったロックマンだった

「スバル・・・・君。」

ミソラが硬直している

「グルルルウウウウウウウウウウウウウ」

唸りをあげたロックマンは地面を思いっきり蹴りウイルスに向かっていった

爪から氷の衝撃波を出し歯に立たなかったウイルスたちが撃沈していった

<なんだ、このパワー・・・・・・>

その姿は恐竜のようで電波を帯びた翼を持ち鋭い爪を持っている

ウォーロックは嫌な感じがした

<二人とも、早くここから逃げろ。>

後ろにいる二人に忠告した

だが時はすでに遅し

体から異名な電波を發しながら後ろ振り向いた

その目はまさに今まさに狩をしようとするティラノサウルスの目である

[illegible]

くやばい、スバルは暴走してる！！早く逃げやがれ！！＞

すぐに逃げようとしたがそこにロックマンが飛び掛かりハープ・ノートに突進した

「きゃあああああああああああああ！」

壁にぶつかりその衝撃で気を失ってしまった

そして再びハーブ・ノートに近づき鋭い爪を振りかざした

くスバル！！いい加減目を覚ませー！！」

振り下ろそうとした瞬間ピタッと止まり電波変換がとけ

スバルはその場に倒れこんだ

一致した周波数とPGM（前書き）

久しぶりです・・・

## 一致した周波数とPGM

スバルが目覚ますと見たのは白い天井

自分がベッドに寝ていたことに気づき体を起した

「んん、あれ？・・・・・・ここはどこ？」

さっきまで自分が暴走をしていたなんてことは当然覚えていない

「お、気がついたか。」

「シドウ・・・・・・・・・・さん？」

目を覚ましたスバルの横に座っていたのはシドウであった

シドウは椅子から立ち上がり棚の上においてあった果物を剥き始めた

「シドウさん、何で僕が病院なんかで寝ているんですか？」

シドウは何も答えず剥いたりんごをスバルの前に出した

「君はドレットタウンの遺跡でウイルスと戦っていたことは覚えているね？」

「はい。でも相手が強すぎてエースPGMを起動させようとしたら・・・・・・」

そこまでしか覚えていないんです。」



スバルは差し出されたりんごを一齧りした

「あのあと、WAXAの研究部が来て遺跡の電波を調べたら大広間に大量の電波が蓄積していた

しかもそれは電脳竜サイバードラゴンの電波。」

「電脳竜。  
サイバードラゴン」

「そう。だがあの電波には電波変換した電波も残っていた……。」

「それってつまり……。」

スバル本人は気づいたのかそれでもシドウは話を続けた

「あれはスバル君。君は電脳竜サイバードラゴンのPGMと融合してしまったんだ。」

スバルは動揺を隠せなかった

りんごを持っていた手がぶるぶると震えていた

「でも……シドウさんはエースPGMを持っていれば融合されることは無いって……。」

先日WAXAで言われたことをスバルは思い出した

だがシドウは首をゆっくり横に動かした

「ああ、確かにそうだった。だが新たなことは発覚した。」

「なんですか？」

「あのPGMとエースPGMは中の構造は全く違うんだが、放っている周波数や

電波は全く同じということが分かった。もう一つのPGMは先に持っていていかれていた

あれもジョーカーPGMと同じようなものだ。」

「じゃあ、僕がエースPGMを起動した段階であるPGMと共鳴してしまった。」

シドウはうなずいた

「じゃあ今後またエースPGMを起動したら暴走するんですか？」

「その可能性は高い。だからいまヨイリー博士に頼んでPGMを組み替えている。」

「じゃあ今後戦うときはジョーカーPGMを使うしか・・・」

スバルはそう考えたがシドウはあっさり拒否した

「だめだ。もう一つのPGMは持っていていかれたといったはずどこで誰が持っているか

分からない状況の中でつかったらさっきの二の舞になる。」

先ほどの大量の電波の話を聴いてわかったのかスバルはうなずいた  
だがシドウの話はこれで終わりじゃなかった

「それと当分は電波変換禁止。」

「え。」

「じゃあ、体には気をつけるんだぞ。」

スバルは突然電波変換禁止といわれ慌てたがそんな事も知らないシ  
ドウは

颯爽と病室を出て行った

## 責任（前書き）

どうもです本日二回目の更新

実はある作者から小説の長さをもうちつと短くしてほしいとの事と  
電脳竜が電脳世界で戦っていたのは200年前ということをお願い  
します

でもこの話短くすることできるかな？

## 責任

病室から出て行ったシドウを見送ったスバルたちは一息ついた

「ふ〜〜〜〜、しかしどうなっているんだ？」

すると病室の入り口のドアが開きウォーロックが入ってきた

< 気が付いたか。スバル。 >

「ウォーロック。どこにいたの？」

< ちょっとミソラのところにな。 >

「え？」

< < やっぱり何も覚えていやしねえ。 > >

ウォーロックもスバルが暴走したときミソラが怪我をしたということとは覚えていないらしい

「ミソラちゃんがどうしたの？」

スバルは身を乗り出すような勢いで聞いてきた

掛け布団の端を掴んでいる手は震えている

< いいにくいんだが、ミソラはスバルが暴走したとき怪我をした。 >

「僕が、暴走して・・・怪我をした。」

硬直しているスバルは少し涙目で呟いた

<ああ、>

「くそ。」

スバルはゆっくりと立ち上がり窓の外を眺めた

「なんで・・・。」

外から入ってくる風がやけに冷たい

「スバル君は悪くないよ。」

突然背中から声がした

振り向くとミソラが松葉杖を突きながらその場にたっていた

「ミソラちゃん、その足・・・。」

「これね大丈夫だよ。ちょっとひびが入っただけ、一ヶ月くらいすれば治るって。」

例え一ヶ月でも芸能活動を一時休止しなければならぬ

スバルはそれが悲しかった

「大丈夫じゃないよ。一ヶ月も芸能活動を休止しなければならぬ

「んでしょ？」

「一ヶ月くらい良いよ。別に引退するわけじゃないし。」

ミソラはにこやかに笑った

「やっぱり僕がいけないんだ。」

「え？」

スバルの呟きにミソラはなんて聞こえたのか分からなかった

「僕がいけないんだ。」

「スバル君は悪くないよ。悪いのは私、付いてきた私よ。きゃあ！  
！」

「ミソラちゃん！！」

ミソラはスバルのほうへと歩み寄ろうとしたが使い慣れない松葉杖でバランスを崩してしまい倒れこんだがスバルが優しく抱きしめていた

「スバル君……………」

抱きしめられたミソラは顔を真っ赤にした

「ミソラちゃんが大丈夫でも僕は悲しい。説得できなかった自分が弱い。」

「違うよ。ホントに悪いのは私。私のわがままに天罰が下ったんだよ。」

突然の出来事にウォーロックはただ見ているだけだった

「私はスバル君と一緒にいたい。」

「？」

眩きが聞き取れず首をかしげた

「だって私はスバル君のことが………」



責任（後書き）

また長くなった~~~~~

~~~~~

サポート（前書き）

やっぱり文全体を長くするのはむずいですね

あと今日バトスピの最終話見てなんだかまゐが悲しそうに見えました

では本文行きますよ〜〜

サポート

「だって私はスバル君のことが……」

ミソラが何かを言おうとしたそのとき病室のドアが突然開いた

「星河君！！あなたが怪我をしたからって言うからすぐに……
ってあれ？」

中から入ってきたのはルナ、ゴン太、キザマロ、母のあかねだった

「あらら、お邪魔だったかしら？」

首を傾げるあかねその後ろにゴン太とキザマロが顔を青ざめていた

そして密着していたスバルとミソラはあわてて離れた

我にかえった委員長はコホンと一つ咳払いをして喋りだした

「んん、スバル君あなた怪我は大丈夫なの？」

「僕はなんとも無いけど、ミソラちゃんが。」

全員の視線がミソラの足に行った

「じ、実は足の骨にひびが入って、全治一ヶ月なの。」

「それってじゃあ、しばらくは歌えないって事？」

「ゴン太君！！それは言っちゃダメですよ。」

ゴン太の口走りにキザマロが止めに入っただがルナに注意された

「あんた達、ここは病院なんだからもうちょっと静かにしなさい。」

二人は静まった

「それで、当分はどういう風に生活するの？」

「一応退院が明後日にくれるってお医者さんが言っていて

そのあとの生活は松葉杖かな。」

その生活に何か不満があるのか委員長はしばらく考え込んだ

「みんなで、ミソラちゃんの生活をサポートするのは？」

提案を出したのはあかねであつた

「それはいい案ですね！！おばさま！！」

「悪くないな。」

ゴン太も賛成しキザマロもうなずいた

「で、スバルはどうなの？」

あかねはスバルに話をふつてみた

「ぼくはいい。」

帰ってきたのは意外な答えだった

「え？今なんていった？」

「僕は良いよ。ミソラちゃんのそばにいとまた何かが起こってしまっ。」

スバルはそういつと病室を出て行つた

開けっ放しの窓から風が強く吹いている

<スバルは俺に任せろ。>

ウォーロックも続いて病室を出た

スバルとミソラの距離はだんだんとのいていた

サポート（後書き）

区切りが中途半端でした

一人で考え込むな（前書き）

少し自分が考えている内容と違ってききました
でもがんばります

一人で考え込むな

病室を後にしたスバルは屋上で星空を眺めていた

「なんで・・・・・・・・・・だよ」

独り言なのか空に向かって言ってるのかスバル自身もわからなかった
その後ろでスバルの背中を見ていたのはウォーロックだった

<<シドウはスバルがミソラを傷つけたことがトラウマになったから電波変換を

禁止したのか？>>

考え込むがなんの思い立ちも無いウォーロックは仕方なくスバルの
ほうへといった

<何一人で考え込んでんだよ。>

「・・・・・・・・・・別に・・・・・・・・」

ウォーロックは意地を張っているスバルを見て呆れ顔をした

<は~~~~~、おまえそんなに世界を三回も救ったのか>

スバルはウォーロックの言った事に反論しない

<おまえそれじゃ、ミソラに合わせる顔がねえじゃねえか>

「だからなんだ」

スバルは珍しく追求し始めた

<一人で考え込んでいても何も始まらねえってことだ

お前は世界を救った英雄なんだぞ>

ウォーロックの一言でスバルの顔が一変した

「そうだね　いつだって一人で考え込んでいても何も始まらなかった

仲間がいるからその壁を乗り越えてきた　僕が間違っていた」

<それでこそオレの相棒だ>

「ミソラちゃんや委員長達に謝ってくる」

スバルは元気よく屋上から出て行った

一人で考え込むな（後書き）

なんか矛盾しているところもありますが勘弁してください

「めん

スバルとウォーロックが話していた頃ルナとミソラは病室の外で話していた

ゴン太とキザマロ、あかねは既に家に帰った

「ごめんね心配かけちゃって」

ミソラがルナに謝った

「なんでミソラちゃんが謝るの？」

ルナは突然謝られ動揺している

「だってスバル君について行ったのも関わらず足手まといになっちゃって……」

それに怪我して皆に心配かけちゃって……」

「ミソラちゃんは足手まといなんかじゃないミソラちゃんがいるからこそ

星河君……じゃなくてロックマン様が強いんじゃない」

するとミソラは突然微笑んだ

「ルナちゃんて本当にスバル君のことが好きなんだね」

突然そのような話をふられルナはびつくりした

「え．．．ちょ．．．ミソラちゃん？な．．．何言ってるの？
わ．．．．．」

わたし．．．が．．．星河君の所をす．．．す
×

動揺しすぎて口が回らない

「いいよ言わなくて」

そしてルナは落ち着いた

「はあ~~~~びつくりした」

「だいじょ？」

「うん．．．じゃあ私のほうからも質問するね

星河君とミソラちゃんって付き合ってるの？」

ルナと同じような質問をしたがミソラはまったく動揺を見せなかった

「うんうん 私も付き合いたいけどなかなか告白できるチャンスが
できなくて．．．」

ルナはミソラの言葉に確信した

自分もこれくらい素直になれば．．．．．と

二人が話していると誰かが階段を下りてくる音がした

「お~~~~い 二人とも~~~~」

声の主はスバルであつた

さつきとは違つていい表情をしていた

「二人とも・・・・さつきはゴメンネ・・・・」

スバルは照れくさそうに謝つた

「いいのよ!! 困つたときはお互い様よ」

「とりあえず元気になつてよかったわ」

二人も続いていった

<みなさん~~~~お取り込み中しませんかもう就寝時間ですよ>

ハープが皆に呼びかけた

「ほんとだ!! 私もう帰らなきゃ」

「委員長一人で帰れる?」

スバルが心配そうに聞いた

「大丈夫よ・・・・・・終電には余裕で間に合つから」

委員長は荷物をまとめた

「じゃあ二人ともお休み」

「「おやすみ」」

委員長は急いで階段を下りた

「じゃあ僕達もそろそろ寝るか」

「うん」

二人は肩を並べて病室に入った

P G Mの正体（前書き）

久しぶりですが訂正があります
ミソラが住んでいた町はこの本編では
ドレットタウンでしたがベイサイドシティです
又随時変更します

P G Mの正体

夜があけた

小鳥のさえずりで目を覚ましたミソラは欠伸を一つしてスバルのほうを見た

「わー！！スバル君の寝顔」

実際問題ミソラは男の子の寝顔を見るのは初めて

「う………うん………ミソラちゃん」

寝返りを打ったスバルは寝言をいった

<あ~~~~あ、スバルのやろう思いつきり寝言をかましていやがる>

スバルより先に起きたウォーロックが言った

<しかもミソラとか言っちゃてるし>

続けてハーブが言った

ミソラは顔が真っ赤になりベッドに倒れた

<わわわわわー！！ミソラ？だいじょ？>

するとスバルがむくりと起き上がった

「んん・・・」

目を擦っているスバル

<オレはしらねえぞ>

「へ？なんのこと？朝っぱらからどうしたの？ってかミソラちゃん
なんで顔真つ赤なの？」

自分が寝言を言ったのはもちろん覚えておらずミソラがおきたのは
数十分後であった

二人はあかねが作ってきてくれた朝食を口に運んだ

「二人とも今日はゆっくり休んでね」

「は~~~~い」

「それとWAXAのシドウさんがスバルたちに話があるって言うて
たけど」

「暁さんが？」

サンドイッチを口に入れたまま首をかしげた

「今日の正午にこつちへ来るって」

「一体何の話だろう？」

そう考えているうちに時は正午

シドウは扉を開けて入ってきた

「元気そうだねスバル君」

「ええ」

「ミソラちゃんも明日には退院？」

「はいでもしばらくは松葉杖ですけど」

<で話ってなんだよ？>

ウォーロックが割り込んできた

<もう少し見の弁えを教えなきゃいけませんね>

突然シドウのハンターから声がした

<げー！！アシッド>

アシッドと呼ばれたウィザードは人工電波生命体である

ウォーロックは少し苦手

「話っているのは昨日この病院でスバル君の体を調べさせてもらった」

「え？僕の体を？」

スバルは驚嘆を上げただがミソラもウォーロックもスバルの体を調べていたなんて事も知らなかった

<で、何があつたんだよ>

「結果……」

シドウは空気が変わる一言を言った

「ベイサイドシティの遺跡で発見されたPGM……すなわちスバル君と融合したPGMは

スバル君の体内に入ってしまった」

<<「!!!!!!」>>

その場にいたスバルたちは驚きの顔を見せた

「それってスバル君と融合しちゃったから体内に入ったんですか？」

ミソラが質問した

だがシドウは首を横にふった

「昨日スバル君にはエースPGMと周波数が一致していて共鳴をした……といったな？」

「はい、確かに昨日そういいました」

「だが昨日また確認したらエースPGMと融合していたのはあなたが間違いではなかった」

<何が言いたいんだ？>

シドウは息を一つ吐いた

「融合していたのはスバル君本人だったっていうことだ」

「え？」

意味が分からない質問に首を傾げる

「エースPGMが融合したって言うのは正確にPGMが更新されてしまい

エースPGMではなくなり新しいPGMになったという事だ」

「じゃあ今後エースPGMを使う〓その暴走したPGMをつかうっていう風になるんですか？」

話が分かっていなくても質問してみたミソラ

「ああ」

<じゃあ結論を言うと……PGM自体は融合されていなく更新されただけで

融合したのはスバル自信……って……じゃあスバルは

!!>

考えていた顔が一変し目を大きく開いた

<星河スバルは^{サイバードラゴン}電腦竜の一部になっているわけです>

最後はアシッドが言った

部屋に沈黙が流れる

「まああせることじゃない まだP G Mを取り出す術は残っている」

「そうですね」

「あと良い忘れたがそのP G Mを使っ^{サイバードラゴン}て電腦竜を復活させようとする組織が動いている」

「またか……………」

<戦うのか…………>

皆が考え込んだ

三回も世界を救った英雄にまた戦いが起こるというのに…………

「僕が話すことはこれでおしまい けどP G Mはもうひとつある組織は

それを使ってくるかもしれん ファイナライズはジョーカーのほう

でも大丈夫だ」

シドウは言ったことは全部まとめて言い部屋を出て行った

「なんか大変なことになっちゃたね」

<平和は短いね>

ハーブが溜息を混じらせながら言った

退院と修学旅行

シドウと話した翌日スバルとミソラは心置きなく退院した

ミソラはギプスをつけたままだが普通の生活には問題ない

と本人は言っているなぜなら・・・

「スバル君、しっかり肩つかんでよ」

「い、いや幾らなんでもこれはくつつきすぎじゃ・・・」

ミソラはなれない松葉杖での歩行にスバルはサポートしている

普通の生活には問題ないというのはこの事である

「あ、もうこんな時間だよ 早く学校にいこう」

「二人とも朝からラブラブね～～～～」

あかねの冷やかしを耳に入れる暇は無くスバルは家を出て行った

学校に着いたのは始業開始ぎりぎりの時刻であった

「ふ～～～～、疲れた」

「ありがとねスバル君」

「はははは」

学校に着くと色々な人がひそひそしているのはスバルも承知していた

時間になったのか担任の育田先生が教室に入ってきた

「みんな、おはよう 今日連絡が二つある」

一つ目はミソラの怪我ということであった

「二つ目は今週の修学旅行の行き先が決まった」

「「「「おお!」「」」」

教室全体が驚きの声になった

<なんだ? 修学旅行ってこんなに盛り上がるものなのか? >

ウォーロックはこの空気を分かっていなかった

「どこ行くのかな?」

隣のミソラがつぶやいた

<私は行ける所ならどこでもいい気がする>

「修学旅行に行き先は………京都に決まった」

「「「「「京都！！！！」」」」」

全員が声を大きく上げた

小学校六年生の修学旅行が京都なんてなんとも贅沢である

「それじゃあ班決めは白金に任せる」

そして一時間目の班決めとそれ以降の授業が終わり

今スバルとミソラは帰りの路地にいた

「委員長とミソラちゃんとゴン太とキザマロと同じ班か」

<なんかいつものメンバーじゃね？>

それもそうで出来すぎた班であつた

委員長は好きな人達と組んで良いとたった一言で終わりこついう構成になった

（買い物の荷物持ちにされる・・・）

決まった瞬間スバルはそう思った

ミソラは男子から何人もの誘いを受けたがかわいい微笑で全員黙殺してしまつた

「家に帰ったら荷物の準備しなきゃね」

「
そう
だね
」

退院と修学旅行（後書き）

実は僕の小学校時代修学旅行の行き先は東京でした
中学校で京都です

古都京都の旅　～当日いきなり～

退院から一週間スバルはいつも通り元気よく登校してた

だが今日は特別な日であつたなぜか……

それは今日修学旅行当日だからである

「ん~~~~~~~~、今何時だ？」

<7時20分>

突然ベッドから起き上がり眠たい目を擦りながら時計の

時刻を確認しようとしたスバルにウォーロックが丁寧に教えた

「へ？7時20分？」

<そうだぜ。あと15分で集合>

「うそ！！早くしないとそれよりミソラちゃんは？」

<ミソラはおふくろと一緒に先に行った　10分前に>

余裕のウォーロック

スバルは昨日用意しておいた旅行かばんをリビングにもって行き

朝飯を食べた

「ウォーロックは何で起きてくれなかったんだよ？」

そこら辺にあったパンを口に入れながらスバルは言った

＜悪いけどおれは何回もお前のところを起したぞ

でも余りに気持ちよさそうだったから起きる気配がなかった＞

「そんなに熟睡していたのかよ～～」

＜あと１０分＞

「ああ！！いそがないと」

スバルの家から学校まで走って行けば１０分足らずである

「よしいこつ」

スバルは家を出た

学校に着くと集合場所であるグラウンドに人の気配が全く無い

「あれ？まさか・・・遅刻？」

するとスバルのハンターから一通のメールが来た

「誰だよ、こんなときに」

送信者はミソラであった

『おはようスバル君。実はね皆集合した時間が早くて出発の10分前にもうでちゃったの』

もし遅れちゃったら直接京都まできてね』

「出発の十分前………」

＜おふくろ達が出て行ったのはスバルが起きる15分前。で、出発が

予定の10分後って言うことは……＞

「僕が起きた時間にもう行ったと………」

スバルはその場にうなだれた

＜電波変換してコスモウェーブ通るか？＞

ウォーロックのナイスな提案だがスバルはあっさり拒否した

「電波変換は禁止でしょ。なんでよりによって………」

考え込んでいる二人の間に春風がピューと吹いている

「しょうがない。シドウさんに頼むか」

＜それしかないな＞

二人はため息をついた

古都京都の旅　く当日いきなりく（後書き）

駄文ですよ

目的地

「よくやったぞ、レウンまず一個……サイバードラゴン・電腦竜の復活が近づく」

（おれは言われたとおりにやっただけなんだけどな）

組織の秘密基地にメンバーが集まっていた

「でもそんなちやちいP G Mでサイバードラゴン電腦竜を復活させることは出来んのか？」

「これはまだだ。復活させるにはまだ飛び散ったP G Mが必要」

「なんだ？そのP G Mって言うのは」

ふと質問してきた巨大な体の男赤髪の男であった

「アヒリタイプブレイク能力破壊これは京都にある……」

「京都……」

そうつぶやいたのは紫の髪の女だった

「そついえば姉ちゃん一回京都に行ったことあるよな」

レウンがそう呼んだのであれば紫の髪の女はレウンの姉であろう

「ああ」

「では今回は誰が出向するんですか？」

幹部のゼオルが質問してきた

「今回はP G M自体ウィザードや電波変換した奴の能力を破壊するものだ

今回はゼオルとサジルに任せる」

サジル・・・・・・・・赤髪の巨体男とゼオルが頷いた

二人は早急に準備に取り掛かった

〃〃W A X A〃〃

「やっぱり奴らが動き出したか・・・」

W A X Aの研究室でシドウが呟いた

「やはりまた起きるのね」

隣り合わせにいた老人・ヨイリーが言った

「スバル君のP G Mを狙ってくる・・・・・・・・」

「それはない。組織はまず飛び散ったP G Mを採取するはずでもそのあとスバルちゃんが狙われるけどね」

「一刻も早く手を打たなければ・・・」

目的地（後書き）

今日は短めです

古都京都の旅　ゝ発見ゝ（前書き）

おやが単身赴任するため一気に投稿します

古都京都の旅　　ゝ発見ゝ

寝坊して皆においていかれたスバルは指導に連絡をとったが

応答せずたまたま鉢合わせしたアマケンの所長天地守にたのみ

高速ウェーブライナーに乗った

「いやゝゝゝ一時はどうなるかと・・・」

<寝坊したのは誰だよ・・・>

「にしてもすごいなゝゝ高速ウェーブライナーは」

今スバルたちが乗っている高速ウェーブライナーは通常のウェーブライナーの

3倍のスピードで走る

<京都には後どれぐらいで着くんだ？>

「25分くらい」

時刻表を見ていった

<くはゝゝゝやることねえなゝゝゝ>

「僕は仮眠するから」

<はいよ>

スバルは仮眠へと入った

一方一足先に京都へ着いていたミソラ達はすでに観光を開始してた

「もー星河君たら何やってるのかしら」

ルナは少々怒り気味である

「あ、スバル君からメール」

ミソラがハンターを取り出し送信者を見ていった

『いま、そっちに向かっているからもうちょっとだから待って』

「だって」

「もしかしてロックマン様できたりして」

ルナは勝手な妄想をし始めた

「こりゃ期待しないほうが良いですよね」

後ろでキザマロが言った

「そうだな」

ゴン太も同情のようだ

「こらー！あんだ達ひそひそ話していないで行くわよ」

「はい」

そしてスバルは……

駅を降りてすぐさま自分の班が向かっている場所へといった

<まずどこから行くんだ？>

「今の時間は……三十三間堂だ」

宇宙人であるウォーロックは全くそこがどういふ場所なのか想像もできない

「とりあえず駅から近いから行こう」

そして東の方向へ歩いてくと古い建物が見えた

「ここが三十三間堂だよ」

すると入り口に数人の男女がいた

「あ！スバル君」

その集団はミソラ達であつた

「ちょっと星河くん！！遅刻するってどういふこと！」

<いいじゃねえか合流できたんだし>

ウォーロックの言葉にルナは静まった

「とりあえず次のところに回りましょう」

ミソラがそういつとスバルはあることに目が行った

「ゴン太たち何その荷物」

みるとゴン太とキザマロは紙袋やらなんやらで両手が塞がり

自分の荷物が持てない状況であった

<委員長とミソラだな>

「たしかに……いやな予感がする……」

やつのことで休めるかと思ったがミソラとルナの買い物で再び疲労が蓄積するスバルであった

そしてスバルが京都に着いたころ二人の男も京都に来ていた

「おーーーーーここが京都か」

赤髪の男サジルが興奮気味にいった

「少しおしとやかにしてくださいねサジル」

その横でゼオルが注意した

グローカーの二人は任務とはいえ怪しまれる格好はせず一般人の服装でいた

「さて、その能力破壊とか言うPGMを探しますか」
アヒリタイプブレイク

サジルはミカルから貰った小型端末機を使い探し始めた

「なあゼオル。この端末の情報に要注意人物ってあるじゃん」

「それがどうかしたんですか？」

「そのところに、ロックマンが入っているんだけどこんな場所にいるのか？」

画面に映し出された写真はロックマンと星河スバルの写真であった

<ウォーロック……>

「このウィザードのことか？レグルス」

ゼオルにレグルスと呼ばれたウィザードはハンターから出てきた

その体はFM星人と同じ体の一部に電波を持っていた

<こいつは俺と同じFM星人だった。まさかこんな小僧についていたとはな>

「でもこんなところにいるのか？そんな奴が……」

「本物がいるんじゃないあ確定せざるを得ないでしょう」

ゼオルが指差した方向には三十三間堂に繋がる横断歩道を渡っている少年であった

「まじ？」

古都京都の旅　ゝ発見ゝ（後書き）

三連休中には戦闘編も入れたいです

番外「ターゲット」(前書き)

タイトルにそれほど意味は無いと思います

番外くターゲットく

スバルたちが京都にいる間ヨイリーたちWAXA研究部は電脳竜の
PGM

で暴走してしまったスバルのために制御できるPGMを作っている

「やはり難しいものね」

目の前にある無数のコンピューターを相手にキーボードを滑らせて
いる

「どうですか。ヨイリー博士」

階段から降りてきたシドウが言った

「なかなかできないものね。周波数が合わない他のPGM使いたい
けど」

サイバードラゴン
電脳竜はもともと電脳世界を破滅に陥る

ものだったから」

「そのことなんですが」

シドウはそつと耳打ちをした

「え！？グローカーが能力破壊を？」
アビリティブレイク

シドウの言葉に驚嘆を上げた

「ええ。しかも僕は気づいていなかったんですがやつらは京都に向かっていて

スバル君たちも今京都にいるんですよ」

「まさか……………」

ヨイリーは考え込んだ

「もし奴らがスバル君の体の中にP G Mがあると知ったら……………」

先日のもので再び電波変換すると負担が多くなるということも分かっていた

「じゃあ。早くP G Mを完成させなきゃね」

「よろしくお願いします」

古都京都の旅　く探し物く（前書き）

今日一日で6話くらいUPします

古都京都の旅　く探し物く

三十三間堂で合流したスバルは次の目的地清水寺を筆頭にいろいろな場所を回った

そして時間はお昼ごろになった

「そろそろお昼にしましょう」

先頭を歩いていたルナは後ろを振り返り提案した

男子集団は女子の買い物の荷物もちで付きまとわれ

くたくたであった

「さんせくくくい」

「たしか・・・この近くに・・・おいしいお好み焼屋さんがあるらしいですよ」

キザマロは息をぜえぜえ吐きながらいった

「じゃあそこで食べましょう」

ランチタイムを終えたスバルたち一行は次なる目的地へと向かった
その行き先は二条城であった

「へえ~~~~ここが二条城か」

松葉杖をつきスバルに支えながら歩いていたミソラが言った

スバルが持っていた荷物は全て近くのロッカーにしまいこんだ

「ほんとだね。僕達が生まれる前からあるなんて」

スバルも同感した

だがミソラがそんなことに同情するなんてのはどうでもよかった

二人の体は密着していてまるで恋人のようであった

そんなことはスバルは全く気づいていないのが悲しい

<くん？まただ>

「どうしたの？」

<駅を降りてからずっと変な電波を感じるんだ。>

ウォーロックの視線が二条城へと向けられた

<あそこから感じる！！行くぞスバル！！>

ウォーロックはスバルをおいていき中へと入ってしまった

「ウォーロック！？……しょうがないな……ミソラちゃん」

「え？」

ミソラに背中を向けた

背中に乗れという意味でスバルは向けた

ミソラはその行為に頬を染めた

しばらく考え込んだがやむを得ず背中に乗った

そして二条城へと入っていった

「あゝあ、どこにもPGMなんてねえじゃねえか」

アリスを片手に持ちサジルは文句を言った

「そう簡単に見つかるもんじゃないですよ」

端末機を持ちながらゼオルは空を見上げた

春の京都はサクラが満開であった

<まで・・・・・・・・>

突然レグルスが止めた

<この近くに変な電波を感じる・・・・・・・・>

視線の先は二条城であった

「ん？二条城？」

「サジルいきますよ」

二人は二条城へいった

古都京都の旅　く探し物く（後書き）

よる更新します

古都京都の旅　く見学く

二条城の中に入ったスバルとミソラはその古さに見とれてしまった

「すごいや~~~~~」

くおいスバル、ポケットとするなばあさんからメールだぞ>

ウォーロックの言葉にスバルはメールを見た

『組織の奴らが京都にいるわ。サイバードラゴン 電脳竜を

復活させるためのP G Mを探しに来たらしい　やつらはロックマンの事は

知ってると思うから電波変換を許可するわそれじゃあ気をつけてね』

<厄介だな・・・>

「なんだろ？P G Mって僕がとつたのと同じものかな？」

<いいじゃねえか何でも。電波変換できるんだし>

「スバル君どうしたの？」

ミソラが突然話しかけてきてスバルは吃驚した

「うんうん、なんでもないよ」

「それじゃあ早く行きましょう」

くくWAXAくく

「ふくくくやっとできた」

コンピュータの前で一息ついたヨイリー目の前には

ひとつのPGMがある

「できたんですか、博士」

「ええ、なんとかあとはスバルちゃんたちが使いこなせるようになるだけ」

「時間の問題ですね」

「そうね・・・」

「キズナ・・・強力なPGMを制御するもの」

シドウは感嘆の言葉を言った

「あの二つのPGM・・・アルタイルPGMとユニバースPGMを制御するにはこれしかない」

古都京都の旅　く見学く（後書き）

乱暴に書き収めました

古都京都の旅　　組織の電波変換

すばるたちがにじょうじょうに入ってから数分後ゼオルとサジルは二条城の裏庭にいた

<ここから電波を感じる>

「確かに端末機からの反応が強い」

「さつさと中に入って取り出そうぜ」

簡単そうで難しいやり方にゼオルはあきれた

「サジル。これは世界遺産ですよびび一つでも入れたらそれでこそ我らの存在がばれます」

「じゃあどうすればいいんだ？」

<電波変換さえすれば建物を通り抜けられる>

レグルスが言った

二人はうなずきハンターを掲げた

「アナザーコード、レグルス・ナイト!!」

「電波同調^{ユニシンクロ}!!ラウル・ゼアス!!」

二人はウェーブロードに行き二条城の上へいった

そしてスバルたちは二条城を見学している

「やっぱすごいな」

「ゴン太君さつきからすごいすごいばっかですね」

「いいじゃねえか。すごいんだから」

<ブルルル、すごいぞ>

ゴン太のウィザードオックスもすごいといっている

流石に昔から作られた建物だけであって木の匂いもそれなりである

スバルが周りを見回しているとウォーロックが声をかけてきた

<スバル。お楽しみのところ悪いが気配がする>

<あら、ウォーロックも気が付いていたのね>

ミソラの相棒ハーブが言った

二人は何かを感じたらしい

だが周りを見てもそうは思えない

すると建物の中から奇妙な格好をした二人が上空に現れた

「なんだ……あれは」

一般人が驚き逃げていった

「あれは……電波変換？」

「なんにもしてねえのになんで逃げるんだ？」

建物の上でラウル・ゼアスが言った

「ゼオルさつさとりに行きましょう」

「待て、」

二人の真下に何人かの少年少女がいた

「あれは……星河スバル？」

<ウォーロックにハープ>

「お前と同じ例のFM星人か」

<ああ>

「丁度良い機械だから手合わせをするか」

<チッ、レグルスのやろうか>

<レグルスは厄介ね>

「二人ともさっきから何を言っているの？」

二人がぶつぶつ言っていることにスバルは気になって仕方が無かった

<あそこにいるオレンジのウィザード……FM星人だ>

「どうする……電波変換の許可は出てるけど……」

<やるっきゃねえだろ!!>

「スバル君電波変換するの?」

ミソラが恐る恐る聞いた

「まだ完治していないから蓄積する量が多い。出来るだけ早く片付ける」

「サジル、能力のほうは任せた俺はあいつと戦う」

「いくよ!!ウォーロック」

<よっしゃ人暴れするぜ>

「トランスコード!!シューティングスターロックマン」

ロックマンはウェーブロードを駆け抜けた

古都京都の旅　ゝ戦闘開始ゝ（前書き）

一時間かけて書いたデータがPCフリーズして消された・・・

古都京都の旅　　～戦闘開始～

「グローカー」

WAXAの司令部室の衛星モニターでスバルたちがグローカーの奴らと戦う場面が見られた

（今度の敵もかなりだ早急に遊撃隊を結成しよう）

するとヨイリーが入ってきた

「博士！！実験のほうはどうでしたか？」

「かなりの力があるわあとはスバルちゃんの力次第よ」
パワー

「そうですか」

「相手はまだ大きな策は打ってきていないわ準備はゆっくりやりましょう」

「はい」

シドウは司令部室を出ていった

「エクスプロージョン鬼神化……………恐ろしいものだわ」

場所は二条城

ウェーブロードを駆け抜けたロックマンはレグルス・ナイト「以下

ナイト」

の着いた

「おまえら……何してる!!」

「ほくくこれがロックマンか」

ゼロルが関心の声を上げた

<久しぶりだなウォーロック>

<お前だったかレグルス>

二人は長い間あっていなかったようだった

「お前らはなんなんだ」

「我らはグローカー。そして私の名はゼロルグローカーの幹部である」

<シドウが言っていた組織って言う奴か>

「お前らは^{サイバードラゴン}電脳竜を使って何かをするのか？」

「察しが良いな、そうだここに^{サイバードラゴン}電脳竜を復活させるためのPGMがあるんだ」

「それでなにするつもりだ」

「悪いがこれ以上いえない・・・戦いに来たんだろ？だったらやろうじゃないか」

<やろういきなりの話題転換で>

ゼオルが体勢を整えた

「ウェーブバトルライド・オン」

「スバル君大丈夫かな」

ミソラは心配そうに言った

「大丈夫よロックマンさまなら」

（私もこの足さえ怪我していなきゃな）

ミソラは心の中でそう後悔していた

「みんな下がるんだ」

電波変換したゴン太・オックス・ファイアが回り込んだ

「みんなでスバル君を応援しましょう」

パニックに陥った二条城は閑散としていた

「行くぞ!!」

「い」

ロックマンは地面を蹴り攻撃を仕掛けた

「バトルカードワイドウェーブ!!」

横幅の大きい波がナイトに向かって放たれた

だがそれを簡単にかわしてしまった

「はい」

「どうした地球を三回も救ったヒーローの力はその程度か」

普通の姿でいるときと違う口調で喋った

「ウォーロックよ、貴様も大分動きが鈍ったな」

「余計なお世話だ、次行くぞスバル!!」

「バトルカード、マッドバルカン」

無数に放たれた銃弾はナイトが避けきれないほどあったが

火で消し去ってしまった

「炎属性か」

「今度はこちらから行くぞ。ファイアウォール
火炎柱」

ウェーブロードを突き抜ける火はロックマンを襲った

「スイゲツザンー!!」

だがロックマンも対抗して火を消した

「なかなかやるな。だがこれはどうだ」

突然姿を消し辺りを見回し現るかと思ったが来なかった

<スバル外だ!!>

ロックマンは二条城の外を出た

<上だ!!>

見上げると両手を振りかざしているナイトがいた

「フレイムスタンプ
火炎鉄槌!!」

頭上から火炎のハンマーがロックマンを襲った

「うあああああああ!!」

吹き飛ばされたロックマンは猛スピードで落下して行ったが

ぎりぎりのところで着地した

「強い……」

<ああ確かにやつは強い。FM王の隠れた右腕とも呼ばれていたからな>

「ケフェウスの……」

<休憩時間は終わりらしい>

目の前にナイトが現れた

「あれを喰らってまだ立っていられるとはたいした奴だ」

「こんなところで倒れたくない」

「往生際が悪い……フレアバースト爆熱砲」

「スイゲツザン!!」

炎属性に相性の良い水属性の技でも威力が大きすぎて防ぎきれない

「はあ、はあ、はあ、」

<<やつぱりダメージが大きい……あれを使うか……>>

「まだやるのか？」

<スバル、ファイナライズだ>

「え？でも暴走するんじゃ……」

くばかやろう。ジョーカーPGMだあれなら暴走せずに済む>

ウォーロックの言葉に多少疑惑が合ったが迷わず頷いた

「あいつら何をするんだ？」

くなんだっていい何かをしでかす前に仕留めれば問題は無い>

「そうだな。初対面で悪いがここで消えてもらおう。」

ナイトは両手に気を溜め始め大きく振りかざした

ボルケーノウェーブ
「煉獄波！！！」

振り下ろした両手から巨大な火炎が出てきた

古都京都の旅　ゝ戦闘開始ゝ（後書き）

夜二話くらいUPします

古都京都の旅　ゝ戦闘開始?ゝ（前書き）

親がなぜかPCを買ってきて更新できるようになりました

古都京都の旅　　～戦闘開始～

巨大な火炎がウェーブロードを突き進む

<行くぞ！！スバル>

「ファイナライズ！！」

スバルがそう言い掛けたのと同時に爆発した

その爆発に気づいたミソラ達は外にいた

「おいスバルの奴大丈夫か」

<大丈夫よ未だ電波は残っている>

「よかった」

ミソラが安心そうに言った

「さてサジルのところへ戻るか」

爆発を背に歩んでいった

だが火の中から声がした

<俺達がこんなところでくたばらねえぞ>

煙の向こうにはファイナライズしたレッドジョーカーがいた

「ボルケーノウェーブ煉獄波を受けながらもファイナライズするとは」

「まだ勝負は決まっていない」

「なるほど。一発で決めるっていうわけか」

ナイトは口元でフツと笑った

そして二人は同時に地面を蹴った

「R G イレイザー!!」

フレイムブレード
「爆炎刃!!」

双方の攻撃がぶつかり合ったウェーブロード一帯に再び爆風が巻き起こった

ミソラ達はただそれを呆然と見ているだけであつた

煙が晴れると二人は膝をついていた

「なるほど・・・やはり戦車の如き技だな・・・」

「あれでも倒れないのか」

息を切らしているのは力がそれほどの残っていないだろう

そのぶつかり合いにサジルが割り込んできた

「ゼオル、あのPGMはなかった．．．．あの電波は古代の電波だったから

似ていたかもしれない」

「．．．．そうか．．はあはあはあ．．今日は撤収だ

ロックマン貴様との勝負はまだ終わりじゃないぞ」

グローカーの二人はウェーブロードから消えた

<厄介な連中だったな．．．．>

「相当な力を使ったよ」

スバルはウェーブアウトした

地上に降り立ったスバルのもとにミソラ達が走り寄ってきた

「大丈夫だった？スバル君」

松葉杖で頑張ってきたミソラは聞いた

「うん、なんとか」

「もう一時はどうなるかと．．．」

ルナがほっとしたように言った

<グローカーか．．．．今後何しかすかわからないわね>

「ひとまず戦いは終わったね」

「今日はもう遅いわねホテルに戻って休みましょう」

クラスみんなはもう帰ってきてるはずだよ」

ルナはハンターにある時計を見ていった

スバルたちは二条城を後にして宿に向かって帰った

京都の夕焼けはコダマタウンの夕焼けよりもきれいだった

古都京都の旅　ゝ休戦ゝ（前書き）

今日から後書きを長くしたいと思います

古都京都の旅　く休戦く

ホテルに戻ったスバルたちはホテルにチェックインしそれぞれ部屋に戻った

「だあー！ーつかれた」

ゴン太がその場に座り込む

「ほんと今日は疲れましたね」

「今日の晩御飯なんだろ？」

「今日はハンバーグらしいですよ」

「おお！！まじか！！」

ハンバーグと聞いて突然ゴン太の目が輝いた

「それより着替えよう」

スバルたちは着替え始めた

そしてスバルは二人よりも着替えを早く済ませ空を眺めていた

<冴えない顔だな>

ウォーロックが話しかけてきた

「うん。今日の戦いを見てみるとまた始まったのかっと思うからさ」

くたしかに・・・サイバードラゴン 電脳竜を使って何をするかわからねえが

また世界が危ないのには越したことじゃない>

「そうだね」

<とりあえず今は修学旅行を楽しもうぜ>

「珍しい。ウォーロックがそんなこと言うなんて」

<ケツ、俺にはたまには休戦しなきゃな>

スバルは微笑んだ

「お~~~~いスバル君、ご飯食べに行きましょう~~~~」

後ろからキザマ口達の声が聞こえた

「わかった」

スバルは部屋を飛び出した

スバルたちが部屋にいたころミソラとルナも着替えていた

「今日もいろんなことがあったね」

荷物を整理していたルナが言った

ミソラはすでに着替えを済ませており星空を眺めていた

「また始まるのか……」

元気ない口調でつぶやいた

「どうだろう……でも今日のロックマン様との戦いを見てみるとそんな気がするわ」

ルナも同じように感じていた

また世界に危機が訪れロックマンであるスバルが遠くへ行ってしまうことが

（ルナちゃんもスバル君のことがやっぱり好きなんだ……）

とミソラは考えてしまう

「ハンデはつきものか……」

「ん？なに？」

「うんうんなんでもない それよりご飯食べに行こう」

松葉杖をゆっくりついてミソラは歩き出した

クラス全員で食べる食堂には豪華な食事が並んでいた

「うお~~~~~うまそーーー」

「ゴン太君、まだ食べちゃいけませんよ」

余計な手出しをしようとしたゴン太にキザマロがとめた

「とりあえず席に着きましょう」

ルナにせかされ席へ着こうとする

が、そこに何人かの男子が集まってきた

「ねえ、ミソラちゃん一緒に食べない？」

「話しながら食べよう」

など大人気国民的アイドルと一緒に食事をするなんて滅多に出来ない為狙ったのだろうか

「ごめんね、私班の人と一緒に食べるから」

その一言で誘いをばつさり切り捨て席へと向かった

「よし全員そろったなじゃあいただきますをするぞ」

先生のいただきますの合図とともにみんな食事をとり始めた

あまりないクラス全員の食事がスバルは全く楽しくなんか無いはずがなかった

そしてお皿に盛られた食事は何も残らずきれいさっぱりなかった
楽しいひと時が育田先生の御馳走様のあいさつで終わってしまい
またそれぞれの部屋に戻った

~~~~~グローカー~~~~~

「ミカル様、例のPGMの反応が二条城にあり調べたんですが似た  
電波だったようでした」

代表としてゼオルが言った

「そうか・・・だがまだ作戦は実行したばかりだ。焦ることはない  
ぞおまえら

アビリティブレイク ウェーブブレイク ソウルブレイク メモリブレイク  
・・・能力破壊、電波破壊、精神破壊、記憶破壊・・・  
この四つのPGMがあればサイバードラゴンが・・・」

「しかしミカル様、サイバードラゴン 電脳竜は歴史上二体いたといわれています

一体しか復活させないのとは何か策があるんですか？」

「もう一つのアルテレギオンのPGMはロックマン・・・・・・星河  
スバルが持つてる」

「星河スバルだと？」

サジルが突然声を上げた

「なんだ？知っているのか？サジル」

レウンが聞いてきた

「知っているのも何も今日ロックマンがゼオルと戦っていたぞ」

「え！？」

「ほんとうかサジル」

「おっしゃる通りです」

ゼオルが小さくうなずいた

「ボス、これは早く手を打った方がよくねえか？ロックマンがP G Mを持っていれば

あぶねえぞ」

「……………そうだな……………だがまずはP G Mを探さなくては意味がない」

ミカルは小さく苦笑した



## 古都京都の旅　ゝ休戦ゝ（後書き）

はい・・・・・・・・なんか意味の分からない文ばかりですいません・  
・  
・

駄文の中の駄文ですね

こりゃひどいわ・・・・・・・・・・・・・・・・書くのって結構疲れますよね・  
・  
・

手がしんどいです

今日の本編では能力破壊　電波破壊　精神破壊が出てきましたが

新たに記憶破壊を入れました

一応今のところでは一番危ないPGMです

はいその名の通り記憶を消してしまうPGMです

電脳竜のイメージはもう全てを破壊する事しかできない電脳竜と思  
ってください

はいこんな駄文続きの物語を最後まで楽しんで頂ければ嬉しいです

## 古都京都の旅　ゝ思いゝ（前書き）

こんです^^今週は三連休なので結構更新できます

今までの内容と一致していないと思いますが何とか修正しながらやります

今の所劇場版も考えていますww

## 古都京都の旅　ゝ思いゝ

夕食を食べ終えたスバルたちはそれぞれ自由時間となり

みんなテレビを見たりトランプをしたり女子の部屋を襲撃したりと  
いう事をやっていた

ゴン太とキザマロはお風呂に入るといいスバル一人が残された

<なあスバル>

「なに？」

<俺たちも風呂入りにいこーぜ>

星空を見飽きたウォーロックはスバルに言った

「やだ。」

スバルは即答した

<即答って・・・俺は退屈だから外に行くわ>

ウォーロックはハンターから出て外に行ってしまった

「もう・・・」

するとハンターから一通のメールが来た

送信者はミソラであった

「あ~~~~~退屈だな~~~~」

部屋の真ん中でばやいているミソラ

ルナはお風呂に入るといってミソラひとりであった

<せっかくの修学旅行なんだからスバルを誘って散歩したら？>

「そうか・・・修学旅行だからね」

<いつその事告白したらどうなの？ウォーロックの方は私が何とかするから>

突然の発言にミソラはびっくりした

「な・・・なにいつてるのよ！！そんなことできるわけないじゃない？」

混乱しているミソラにハーブは忠告した

<だって考えてみ、今告白しないでいつするの？この前だってしそこねたじゃん

ああみえてスバルってモテるかもしれないんだよ？>

「でも・・・私が告白してもスバル君がどういう反応するか・・・」

<そんなのやってみなくちゃわからないでしょ！！さあ早くメール送ってよ>

「もう強引なんだから」

そう言いながらもミソラはスバルにメールを送った

旅館の入り口でスバルはミソラを待っていた

メールの内容はこうであった

『少し散歩しない？旅館の入り口で待ってて。すぐ行くから』

という内容であった無論スバルは何もすることがないので旅館の入り口にいた

数分後ミソラが松葉杖をつきながら来た

「ごめんごめん、少し遅れちゃって」

「大丈夫だよ。それより足だいじょ？」

「うん。大丈夫だよそれより行こう」

二人は旅館を出た

京都の春は夜になると少し冷え込むためスバルとミソラは上着を着ていた

「寒いねーこの夜は」

道路沿いを肩を並べて歩く二人最初の言葉はスバルが言った

「ほんと、コダマタウンとは違うね」

春という季節でも二人の吐息は白い

二人が歩いている道は誰もいなく今は静まり返っている

（今しかない、告白するには今しかない）

そう心に強く打ちこみチャンスをつかがった

途中ベンチがあり二人はそこに座った

スバルは星空を眺めているだけで話してくる気配はなかった

そしてミソラは今しかないと判断し話しかけた

「ねえスバル君？」

「なに？」

心の準備しかしておらず何を言えいいか考えていなかったミソラ

は口ごもってしまった

「そ、そのスバル君で私がこの世からいなくなったらどう思う?」

適当なことを言っでしまいでんぱってしまった

(わあ!!何言ってるんだ私!!)

だがスバルは嫌な顔一つせず答えた

「そりゃ、悲しむよ。一番最初のブラザーが突然いなくなったら悲しいな

もしその前に伝えたいことがあったら絶対後悔しているな」

ミソラはその言葉ドキツとした

三回も地球を救ったヒーローがまた遠くへ行ってしまうのではないのかと思ってしまった

「私……………」

ミソラは突然泣きだしスバルにすがり付いた

「え?ちょっと…………ミソラちゃん?」

突然泣き出したミソラに驚いたスバルはどういった行動を

取ればいいのか分かるはずもなかったただスバルの服を掴む腕が強くなる一方だった

「私・・・またスバル君がどこかへ行っちゃうんじゃないかって思っ  
ちゃったの」

こんな質問してバカだね・・・」

「ミソラちゃん・・・」

スバルはそれを言う事しかできなかった

だが次の瞬間衝撃的な言葉を放った

「私は・・・スバル君が好きなの・・・」

私と付き合ってほしいの・・・」

「え!?!」

いきなり言われてびっくりしてしまった

スバル自身もミソラが好きであっただがスバルが言っているすきは

ミソラがさっき言ったすきとは全く違うものだという事は分かった

「僕からもよろしくね」

スバルはそう言うとミソラを優しく抱きしめた



## 古都京都の旅　ゝ思いゝ（後書き）

初めてのスバミソ？結構むずいです・・・..  
この修学旅行が終わったら次はどの話にしましょうか

## 古都京都の旅　ゝ最終日ゝ（前書き）

なんか前回の話は全くの駄文でした・・・・・・・・  
何度も言うつと思いますけど

これまでの話と全く噛み合っていないかもしれないかもしれませんが  
指摘などあったらよろしくです・・・・

さて・・・・・・・・本文です

今日は修学旅行最終日です

一泊だけっていうのもなんですが

一応これで最終日です

あ！！！！オリキャラも出ますからね！！

## 古都京都の旅　　最終日

ホテルに戻ったスバルとミソラは男女別々の部屋へと分かれる廊下で別れの挨拶をした

「じゃあお休み」

「うん・・・またあしたね」

ミソラは笑顔で言った

スバルは部屋へと戻るミソラの姿を見ているだけで姿が見えなくなると

部屋に戻った

〃〃WAXA〃〃

ヨイリーはモニターに映し出された地図を凝視した

するとそこに研究員が駆け付けた

「ヨイリー博士！！PGMのありかがわかりました。場所は・・・です」

「そう・・・ほかのPGMの在り処は？」

「現在調査しています見つけ次第報告します」

「グローカーに見つからないようにね」

「はい」

研究員はその場を離れた

「一番危ないのは……メモリブレイク記憶破壊ね」

地図に映し出された場所は北海道であつた

ヨイリーはアメロツパにある人物に連絡を取つた

くくアメロツパくく

とある広大な草原で二人の少年少女がその場に立ち尽くしていた

少年の手にはハンターがあり誰かと連絡を取っていたようだ

通話が終わったのかハンターをしまった少年は一息ついた

「久しぶりに日本に帰るのかくくくく」

少年の隣にいた少女は大きく伸びをしていった

「奴らが狙っているPGMは北海道にあるっていうからその応援だつて」

「でもコダマタウンっていう町にまず行くんじゃない？」

少女が聞いた

「ああ、WAXAで遊撃隊というものを結成するらしい

だから学校もしばらくコダマ小学校っていうところに通うらしい」

「そこに星河スバルっていう人がいるんじゃない？」

「そうだな……世界を三回も救ったヒーローがいるんか」

「確か響きミソラっていう子もいるんじゃない？狙っちゃだめよハルト」

ハルトと呼ばれた少年は少女に向かって呆れた顔をした

「誰が狙うだつて？勘違いするなよミオ」

「それもそうね」

二人は風になびく草原を見ていた

「星河スバル……………」

ハルトはそう呟くだけだった

〳〳京都〳〳

朝5：30

珍しく早起したスバルは暇で仕方なかったのでテレビをつけた  
どうやら昨日の騒動はそうでもなかったようだったのでニュースに  
はなっていなかった

テレビを消したスバルは仕方なく昨日のことを思い出してみた  
グローかという電腦竜を復活させる組織、そしてその一人と戦った  
こと

ミソラに告白されたことなどが思い浮かんだ

実質今日は修学旅行最終日であった

今日の予定は個人自由行動であった

時間内に集合場所に来れば京都府内どこにでも行っていいというらしい

スバルはいつものメンバーで行くという事は予測していた

<なあスバル>

突然ウォーロックが声をかけてきた

「どうした？」

<悪いけどちょっと外でていいか？>

スバルは言われるまま外へ行った

朝日が少し照りつけていても気温は低い

「どうしたの？外なんか呼び出して」

<昨日ファイナライズをしたとき変な感じしなかったか？>

「いや・・・別に。でもなんで？」

<メテオGが地球の軌道を外れてからファイナライズをすると何か違和感を感じたと思ったが

この前のことがあるし・・・>

「だいじだよ。ヨイリー博士がPGMを使えるように制御できる物作っているから」

<そうか・・・悪い>

そういうとハンターに戻ってしまった

「なんなんだろ？」

スバルは首を傾げることしかできなかった

部屋に戻ったのは6：15起床時間であった

ゴン太とキザマロはあくびをしながら起きた

二人は目をこすりながら着替え始めスバルと共に食堂へ行った

食堂に着くとすでにミソラとルナが席にっていた

ミソラ八昨日のことが何もなかったように微笑ましい笑顔でいた

先生の合図で全員食事をとり始めた

「今日はどこ行く？」

最初の一言はルナがいった

「平等院鳳凰堂がいいです」

「却下」

キザマロに意見を早急に却下したルナ

「なんでですか？」

反論するキザマロ

だが

「遠いからダメ」

の一言で撃沈してしまった

続いてミソラが意見を言った



「私、清水寺がいいな」

「あ、いいね」

スバルがミソラの意見に賛成した

「あと金閣寺がいいな」

こうしていき場所は金閣寺と清水寺に決まった

余った時間はお土産を買う時間となった

自由行動なのに荷物持ちに使わされるのかと思った男子一同

「よし！！さっそく準備開始よ」

<その前に飯食わせろよ>

ウォーロックの一言でルナは静まり返った

そして朝食が終了しそれぞれの部屋に戻り準備しホテルを出た

## 古都京都の旅　ゝ最終日ゝ（後書き）

まあ最終日というよりその準備みたいなものですね  
オリキャラが出てきたんですがネーミングが微妙です・・・  
とりあえず頑張ります

## 古都京都の旅 ー自由行動及び帰宅ー（前書き）

後2話で修学旅行編が終わります

次回の話は遊撃隊が北海道に向かう話にしようかなー

なんてw w

でも劇場版の話も考えないと

ハルトたちが電波変換？した状態になったら書こうと思います

では駄文をどうぞご覧あれ

古都京都の旅　～自由行動及び帰宅～

スバルたち一行がまず行つた場所は金閣寺であつた

金閣寺はホテルから十分の所にあつた

敷地の中に入ると広大な建物が見えた

「「「「「おお～～～～～～」」」」

全員が絶叫した

「すげーや」

「さて回っていきましょ」

みんなそれぞれ園内を回つた

スバルとミソラは一番金閣寺が見える場所に行つた

「すごい、水面に金閣寺が映ってる」

「ほんとだ、きれいだな～～～～」

二人合わせて嬉しそうな声を上げた

周りから内密な関係になつていても二人はいつも通り話している

だがミソラにとってそれは幸せなことだった

「向こうにお守りがあるらしいから買わない？」

スバルが提案してミソラはうなずいた

「うん！！！」

二人は階段を上って行った

売っていたお守りはいろいろな種類があった

恋愛運、仕事運、金運、健康運、勝負運などのものがあつた

ミソラは仕事運のお守りと恋愛運のお守りを買った

スバルも同じように恋愛運のお守りと勝負運のお守りを買った

「おそろいだね！！」

ミソラ嬉しそうに言った

「うん」

二人は顔を赤くしていった

そしてルナ達と合流して次なる場所清水寺に行った

清水寺からは三年坂を上って行った

「ここを転ぶと三年以内に死ぬらしいわよ」

パンフレットも何も持っていないルナが言った

「へえ………そうなんだ」

スバルは感心そうに言った

階段を上りお寺が見えてきた

中に入ると人がいっぱいいた

さすがに本物の響ミソラがいると通行人や見物人も絶えないであろう

だがそれについては対策済みであった

ミソラの服装は帽子をかぶりメガネをかけていた

外見からは分からないほどの服装であった

建物の中には警官ウィザードが多数いた

「やっぱり古いお寺だから壊さないようにしっかりと警備してるんだね」

<けど昨日の戦いでよくあのお城壊れなかったな>

「あれは自動的に防御装置が作動したからね」

スバルが説明した

そしてスバルたちは記念撮影を取り余った時間お土産などを買う時間にした

元氣よく先頭を歩くミソラとルナの後ろで重たそうな荷物を持っている

男子集団は周囲の人たちから目立っていた

〃〃WAXA〃〃

「……できた……これで完全に制御できるわ」

「やっとですね」

シドウが深々と言った

「サイバードラゴン電腦竜の力を制御するPGM……【キズナ】

これがあのスバル君のPGMと融合すればアルテレギオンの力を秘めた

ロックマンが暴走することはない」

「アルテレギオン……それと対立するもう一体のサイバードラゴン電腦竜

奴らは何が目的で……なぜ一体のPGMしか狙わないんだ」

「それはわからない……でも奴らがまた世界の存亡の危機の陥る事をするかもしれない」

「博士……ほかのPGMの方は……」

「すぐる順調よ遊撃隊のメンバーに渡す予定も考えているわ」

「そうですね。わかりましたでは北海道に出撃するための作戦を練ってきます」

シドウはそういうと部屋を出て行った

PM3:00

集合場所である駅に時間通りついたスバルたちは

クラスのみんながいる場所へ行った

「ふ~~~~、つかれた~~~~」

柱に横たわったスバルが言った

「ホントあつという間だったね」

「コダマタウンに帰りたいような帰りたくないような……」

そう話していると集合時間になりクラス全員集まった

「よし、みんなそろったな。二日間楽しめたか？」

これから家に帰るがウェーブライナーの中に忘れ物とかしらないよう



に。特に牛島」

「おれすか？」

「ああ、今日ホテルに時計を忘れていったらうが」

先生がゴン太の時計を掲げた

「うげ!!」

「もうだらないわね」

ルナが忠告した

すると向こうからウェーブライナーが来た

「よしじゃあ乗るぞ」

こうしてスバルたちの修学旅行は終わった

またグローカーと能力PGMをめぐる戦いが始まるのと同時に

くく空港くく

「ミオ!!早く来いよ」

「ちょっと待ってよ……ハルト荷物少なすぎ……」

「お前が多いからだろ」

ハルトとミオは現在日本の空港に着いたところである

ハルトは旅行鞆を片手に持ちミオは旅行鞆＋いろいろな荷物を持っていた

二人はウェーブライナーに乗って目的地へ向かった

「明日から学校行くの？」

「明日は修学旅行の振り替え休日だってだからいくのはあさってから」

「いいな~~~~修学旅行、どこ行っただんだろう？」

首を傾げるミオ

そのよこでハルトは窓から見える景色を見ていた

「そんなに星河スバルと会うのが楽しみ？」

ミオが聞いてきた

「別に……ただ今の日本も大変だなーって」

「サイバードラゴン 電腦竜ね……私たちは遊撃隊で参加か」

「なんか呼ばれたのに冴えない顔じゃなか、ミオ>

突然彼女のハンターから声がした 彼女のウィザードであろう

「いや遊撃隊で参加はいいんだけど学校になじめるかなって……

でもアクアスには関係ないじゃん!」

アクアスと呼ばれたウィザードはクスクスと笑った

＜ハルトは学校になじめそうか＞

彼のウィザードも声をかけてきた

「う〜〜〜ん、どうだろう………まあ向こうの人は仲良  
くしてくれるだろうから

心配ないし………スコルピはほかのウィザードと仲良  
なれそう?」

スコルピと呼ばれたウィザードは答えた

＜向こうにはウォーロックとかいう宇宙人がいるからなまあ何とか  
なるだろう＞

「次は~~~~~WAXA日本支部前~~~~」

アナウンスが二人の下車を告げる合図になった

古都京都の旅 〽自由行動及び帰宅〽 (後書き)

あああああ・・・疲れますね  
なんか全然話がまとまらない  
これから先の話が心配です

## 二人（前書き）

以前思ったんですがタイトルロゴ？みたいなものって皆さんどうやって作っていらっしゃるのでしょうか・・・

自分絵という物には全く才能がないんで・・・

では本文

## 二人

コダマタウンに着いたのは夜の5時くらいであった

ウェーブライナーを降り解散式をしてみんなそれぞれ家に帰った

「じゃあミソラちゃん帰ろうか」

スバルは重たい荷物を持ちながら言った

「うん」

二人は家へ帰った

「明日と明後日は休みか・・・ねえスバル君月曜日どっかいかない？」

「え・・・別にいいけど。でも足はもういいの？」

スバルは包帯を巻いているミソラの足を見ていった

「だいじょだいじょ、スバル君に支えてもらえば問題なし!!」

「あ!!でも月曜日病院行くんじゃないかったけ？」

「・・・・・・・・・・そうだったけ？」

「とにかく明日は宿題をやって明後日は病院に行かなきゃダメだよ」

「ちえーつまんないの」

ミソラはつまらなそうな顔をした

二人が話していると家はすぐそこであった

スバルは玄関のドアを開けた

「「ただいまー」」

「「おかえり!!!」」

大吾とあかねが二人を迎い入れた

「たのしかった？二人とも」

「楽しかったよ、あ、あとこれお土産」

スバルは鞆から袋を一つ取り出した

「私からも」

「二人とも疲れただろ。お風呂入って寝ちやいなさい」

「「はい」」

二人はそれぞれ部屋へと戻った

〓〓WAXA〓〓

「ここがWAXA日本支部……」

「ハルト早くはいろ？」

ミオはハルトの手を引っ張りながら中に入った

指紋認証を行い中に入るととても広い広さだった

「すごい……これが……」

「ようこそ、WAXA日本支部へ」

シドウが声をかけた

「君は……西蓮寺ハルト君だね？そっちが……ミオちゃん……彼女かい？」

突然ミオを彼女と言われ動揺してしまう

「ち、違いますよ 幼馴染ですから……」

「そうですよ……」

「ふ……ん、まあ似たような二人もいるから」

二人はその言葉に首を傾げるしか方法はなかった

案内された場所はヨイリーがPGMを作っていた研究室であった



「ヨイリー博士はいりますよ」

シドウが声を掛けたら部屋のロックが解除された

「初めまして……っていつでも電話で話したわね」

「はい。アメロッパから来ました西蓮寺ハルトです」

「同じくアメロッパから来ました鳴無ミオです」

そして二人のウィザードも出てきた

<スコルピだ>

<アクアスです>

「おお！！アシッドと同じ人工電波生命体か」

「アシッド？」

<私のことです>

ハンターからアシッドが出てきた

「さて、話を始めましょうか……二人に来てもらった理由は電話で話した通りよ

グローカーの<sup>サイバードラゴン</sup>電脳竜復活を阻止してほしいの

だからロックマン……星河スバルと一緒に協力してちょうだい」

「言われなくてもやります!!」

「じゃあ二人にまず任務……と言いたいところだが宿舎に行って荷物を整理してきてくれないか？それで今日はゆっくり休んでくれ」

「え？でも任務とかいいんですか？」

「ああ、なんせアメロッパから来たからなそれにまだ遊撃隊を結成していない」

火曜日から始まる学校の準備もよろしく頼むぞ」

「はあ」

二人は言われるまま宿舎へ行った

「ひろい~~~~」

「ここで男女二人使うんか？」

「何？不満？」

ミオの視線にハルトは殺気を感じた

「いいえ。不満なの文句なの一切ありません」

「とりあえず荷物の整理をつと……」

宿舎での生活は複雑なものになりそうだとハルトは思っていた

お風呂に入ったスバルは夜風にあたっていた

「修学旅行あつという間だったね」

<オレはこの家の方が落ち着くけどな>

山から月が出てきた

<くん？スバル、メールだ>

開くとシドウからだった

『月曜日WAXAに来てくれないか？』

だった

「行く？」

スバルが聞くとウォーロックは

<多分あのPGMを制御する物が作れたんだろう。行ってみようぜ>

「わかった。さて今日は早く寝るか」

<そっしよし>

ミソラは自分の部屋がもらえたため今日からそこで寝ることになった  
スバルは布団に入り寝静まった

## 二人（後書き）

う~~~~んいまいちです

それとミオの名字は鳴無・・・読めます？  
『おとなし』です

## WAXAでの生活（前書き）

今回はハルトとミオの話です（スバルの話はネタがなかったんで・  
・）

さてどんな話になるでしょう

・・・劇場版何にも書いていない・・・orz

## WAXAでの生活

日曜日、今日から遊撃隊の訓練かと思った二人……だがその前に片づけるものがあつた

「これをどうにかしなきゃ」

ハルトの目の前にあるのは積み上げられた荷物

もちろんハルトではないハルトの荷物は必要以外のものは持ってきていなく

こんなに多いわけがない

時刻は7:00ベッドで気持ちよさそうに寝ている少女がこの荷物の持ち主である

「……しょうがない。起こすしかないか」

ベッドに行き揺さぶろうとしたがハルトはそれができなかった

<どうした？ハルト>

カリエスが聞いてきた

「いや………なんか寝顔を見ていると起こせなくて」

<それっていつものパターンじゃない>

リヴェルトが面白そうに言った

<いつもハルトがミオの所を起こしているからな>

カリエスが懐かしむように言った

「なんか勝手な妄想してるけど……仕方ないリヴ頼んだよ」

<はいよ>

リヴェルト《以下リヴ》はトランペットを取出し鳴らし始めた

朝には大きすぎる騒音それでもミオは何のへんてつもない顔で目覚めた

「ん？なに？」

「ミオ寝過ぎ荷物の整理しなきゃいけないんだよ」

耳をふさぎながらハルトは言いミオを引っ張り起こした

「ほら、早く着替えて荷物の整理しよう」

「ふあ~~~~~い」

ハルトは洗面所に行きミオはパジャマを脱ぎ捨て服を探し始めた

「あれ？着替えがない」

どこを見ても自分の服がなくミオは仕方なくハルトに聞きに行った



下着のままで

「ねえ、ハルト私の着替え知らない？」

「え？確かそこに掛けてあるはずんだけど……」

ハルトがミオの方を向き硬直した

「ミオ……お前なんて格好してんだよ……」

寝ぼけているミオは自分が今どういう姿なのか認識できずにいた

しかしハルトの驚いている顔と自分の下着姿を見て

震え顔になった

「きゃああああああああああああああああ……」

ミオの悲鳴とハルトの顔を叩く音がWAXAの宿舎に盛大に広がった

「あはははははははははは……！そうかそうか」

ハルトたちの部屋でシドウは爆笑してた

「笑わないでくださいよ暁さん」

平手打ちを食らったハルトの顔は真っ赤に腫れ上がっていた

あの悲鳴を聞いて宿舍にいた全員が駆け付けた

その時のハルトはミオの平手打ちにより撃沈してた

（もうお嫁にいけない……）

ミオは自分がした事が恥ずかしくて仕方なかった

「いや……しかし君たちは面白いね」

「もうからかわないでくださいよ。で、話ってなんですか？」

ミオはシドウに淹れたてのコーヒーをだし話した

「そうそう。実は明日WAXAに星河スバルが来て本格的な遊撃隊を結成しようと思うんだ」

「え？星河スバルが来るんですか？」

「ああ、まああいつに言ったことは、例のPGMができたから取りに行つて

欲しいって言う事だから」

「例のPGM？」

ハルトは首を傾げた

シドウはコーヒーを一口啜ると喋った

「サイバードラゴン 電腦竜の PGM さ。スバルはそのサイバードラゴン 電腦竜と融合しちゃっ

てまあ大変なことになったわけだ」

「そうですか……」

「まあとりあえず今日は荷物の整理をしちゃいましょう」

ミオが元気よく言った

「殆どはミオのなんだけどね……」

「てへ」

「まあそう言う事だ、おれは失礼する」

シドウはコーヒを一気に飲み干し部屋を出て行った

「さて部屋の整理でもするか」

「そうだね。じゃあハル……」

「ミオは自分の荷物をやってね」

言い切る前にきっぱり言われてしまい舌打ちをしたミオ

PM 5:00

「やっと終わった~~~~~」

「はあ疲れた」

二人はベッドに寝転び一息ついた

一日中部屋の掃除なの荷物の整理なのしていた為疲れるのは当然のことであつた

「夕食まで時間あるからお風呂入ってきたら？」

ハルトは勧めたがミオはその前に寝てしまっていた

「ったくしょうがないな」

ハルトは仕方なくミオの体に布団を敷き部屋を出た

## WAXAでの生活（後書き）

う~~~~ん出始めたわりに微妙ですね

もうちょっと工夫をしなければ

## 出逢い（前書き）

オリキャラのウィザードの名前変更しました  
あと劇場版ですが予定ではサイバーテロと戦う予定でいます  
さて本文でも行きますか

## 出違い

月曜日スバルは病院へ検査しに行ったミソラと一緒にWAXAへ行った

「ミソラちゃん怪我の方はどう？」

「今秋にはギプスを外すことができるって」

二人は話しているうちにウェーブライナーはWAXAに着いていた

「暁さんの話ってなんだろう？」

「また悪い奴らが動き出したから遊撃隊でも結成するんじゃない？」

「へ、俺がすべてぶっ倒してやる」

「あんたもうちょっと落ち着いたら？」

話しているとスバル達の前方にゴン太がいた

「あれ？ゴン太こんなところで何してるの？」

「いや、シドウさんに呼ばれてきたんだけど誰も来ていないようで」

「やっぱり遊撃隊のことね」

ハープが断言した

<とりあえず中に入ろうぜ>

中に入ると一人顔馴染みの少年が立っていた

「ジャック!!」

「スバル!？」

ジャック・・・以前ディーラーという組織で流星『メテオG』を

落とす作戦をした人物であった

「ジャックも暁さんに呼ばれたの？」

「ああ、でも俺はもともとこの宿舎に住んでいるからな」

「で？後ろの二人は？」

ひょこつとミソラが顔を出してきて

ジャックの後ろにいる二人の少年と少女について尋ねた

「この二人は昨日アメリッパから派遣されてきたんだ」

ジャックが説明をすると二人は自己紹介をした

「はじめまして、西蓮寺ハルトです」

右側の男の子がしゃべった



続いて左側の女の子がしゃべった

「鳴無ミオです」

自己紹介が終わると今度はスバルが先頭を切って喋った

「僕は星河スバルよろ・・・」

「しってるよ」

不意にハルトが言った

それに続きミオも言った

「その女の子が響ミソラ。でっかい男の子は牛島ゴン太ね」

ミオは『完璧でしょ』というような顔で言った

<おまえら電波体持っているだろ？>

ハンターからウォーロックが出てきた

（これがウォーロック）

ハルトはウォーロックを凝視した

「もちろん持っているわよ。じゃなきゃアメロッパからこんなところまで来ないわ」

ミオが言いきったがウォーロックは質問を続けた

<それは知っている。質問が悪かったようだったな。俺が言いたいのはお前らの

ウィザードは一部のデータにFM星人のデータがあるだろう>

「「!」」

「どういう意味？」

話の内容が理解できないスバルは迷わず質問した

<こいつらのウィザードはアシッドと同じ人工電波生命体だが

データが違う。奴らにはFM星人のデータが含まれている

そうだろう？さそり座のスコルピ、みずがめ座のアクアス>

ウォーロックが誰かの名前を呼ぶと

すかさず二人のハンターから二体のウィザードが出てきた

<さすがはAM星人の生き残り>

<やつばすごいな>

現れたのはサソリのような姿の電波生命体スコルピと

みずの妖精の様な姿をしたウィザードアクアスだった

< 確かお前らはアンドロメダにやられたんだろ？ >

ことごとくウォーロックが質問攻めをしてくる

< さあ、どうだろう >

適当な答えを返すスコルピ

< ふん、まあいい >

ウィザード同士会話しているとシドウがけな気な目でこっちを眺めていた

「そろそろ時間なんだけどいいかな？」

時間を忘れていたスバルたちは大急ぎで研究室に向かった

## キズナ（前書き）

昨日更新しようかと思いましたが親がうるさいので  
できませんでしたすんまそ・・・

## キズナ

「ヨイリー博士、全員揃いました」

全員いるのを確認した全員横一列に並んで窮屈さは見られない

「じゃあシドウちゃんから話して」

先に話すように言われたシドウは何秒か間を開けていった

「君たちに呼ばれた理由、それは分かっていると思うが

サイバー・フロン  
電腦竜を凶悪に使い世界を滅ぼそうとしている組織

グローカーが動き出している。君たちはその組織に対抗するため選ばれたメンバーである」

続いてシドウからヨイリーが話を始めた

「そのグローカー一人一人強力な力を持っている。

それに匹敵するための新しいPGMを渡すわ」

するとスバル以外全員のハンターにPGMが送信された

「このPGMは？」

すかさずハルトが聞いてきた

「これは『キズナ』というPGMよ。発動するにはその人の絆の力が必要になるわ」

「発動したらどうなるんだ？」

次はゴン太が聞いてきた

「メタモルフオーゼ変幻能力という現象が起きて電波体に変化がみられるわ

その時の電波の周波数に合わせて戦うことができるわ」

丁寧な説明に一同は納得した

だが不機嫌なのが約一名

<おい！！ばあさん、俺たちのPGMはねえってどういうことだ！>

今でも鼓膜が破れそうなくらいの声でウォーロックが叫んだ

シドウとヨイリー以外全員耳を押さえていた

<ウォーロック、自分だけPGMを渡されない如きで嘆くのは周りに迷惑です>

シドウのウィザードアシッドがウォーロックに言い放った

<う………>

どうやらウォーロックはアシッドの前では口が立たないらしい

「大丈夫よ、スバルちゃん達の分は後で渡すから」

それを聞いてスバルはほつと胸をなでおろした

「遊撃隊の出動はグローカーが動いたときに出る

だから不定期だからな。ちなみに今回の場所は北海道」

「北海道に何があるんですか？」

動揺もせずミオが聞いた

だが見てみるとスバル達も驚く暇はないようだ

「能力破壊アヒリティブレイクが北海道にあるという情報が出ている

奴らも北海道に行く可能性は高い。今回の任務はスバルとミソラとハルトとミオに行かせる」

「能力破壊アヒリティブレイクってグローカーが言ってたやつだよな？」

ミソラが横にいるスバルに聞いた

「そっといえば……能力破壊ってどういう物なんですか？」

能力破壊アヒリティブレイクがどういう物か知らないスバルはヨイリーに聞いた

「能力破壊アヒリティブレイクは電子機器やウィザードの能力を

破壊するPGMよ。電波変換した人間にも危害が加わるわ」

「ほかのPGMもあると聞いたんですがその場所は特定できたんですか？」

「まだ確認していないな。とりあえず北海道にあるという事だけがわかってる

他は手当たりしだい探してみる」

そして今回の会議はお開きとなった

「スバルちゃん」

ヨイリーに呼び止められたスバルはミソラ達を先に外へ出させ残った

ヨイリーはスバルのハンターにPGMを送信した

「これは何ですか？」

「キズナ。キズナの進化版とも言っているわ」

「そんなすごい代物俺たちがもらっているのか？」

ウォーロックがハンターから飛び出していった

ヨイリーは真剣な表情で言った



「スバルちゃん達だからだよ。これは<sup>サイバーデモジョン</sup>電脳竜、アルテレギオン

のPGMを制御することができるのよ」

「アルテレギオン？」

その言葉に首を傾げるスバル

「<sup>サイバーデモジョン</sup>電脳竜の名前ももう一体はユニバサリオン。

どちらも強力な力を秘めているわそのPGMを使えば暴走せずになれるわ」

「すごい」

「でもよ、同じようにキズナの力がなきやダメなんだろう？」

「そうね。でもその力を発揮したときロックマンはさらなる力を秘めるわ」

まさに鬼神の様な力……<sup>エクスプロージョン</sup>鬼神化よ」

一つ一つの質問を丁寧に答えていくヨイリー

そしてウォーロックは興奮したような声で言った

「おお！！なんか強そうじゃねえか。>

感嘆の声が出てくるウォーロックにスバルは気にせず気になったことを言った

「でもやつらは僕の体内の中にあるP G Mを狙ってくるんですか？」

「奴らが今の所スバル君のP G Mを奪う気はないようだけど

くれぐれも気を付けるように」

「わかりました」

P G Mをもらい元気になりつつであった

「それじゃあ気を付けて帰ってね」

「失礼します」

スバルは研究室を出て行った

その背中は今まで以上に輝いていた

## また転校生

「これからどうする？」

スバルが戻ってきてその場に立ち尽くしていたミソラ達は  
退屈していた

「そうね宿舎に行っても何もすることないし」

ミオが考えながら言った

するとミソラが何かを思い出したかのように言った

「そういえばスバル君、お母さんにお遣い頼まれていなかった？」

「そういえばスピカモールに……ごめん、みんな先に帰ってるね」

スバルとミソラは早々と去って行ってしまった

「あの二人は付き合ってるの？」

ハルトは横にいたジャックに言った

「さあ？本人に聞いてみたら」

首を傾げるジャックは知っているかのような口調であった

そしてハルトはこの場においても意味がないと思いミオに声を掛けた

「ミオ、僕たちもどっか行く?」

唐突にハルトが聞きミオはびっくりした

「え?じゃあ………ヤシブタウンのデパートで買い物した  
いんだけど」

ハルトは了解を得てウェーブライナーに乗り込んだ

「さて俺は姉ちゃんの料理食わなきゃ」

ジャックはそういい宿舎に帰っていった

「あれ?」

一人残されたゴン太はどうしていいのかわからず近くの牛井屋に立ち寄った

〃〃グローカー〃〃

静寂の広間には何人かの大人と子供が立っていた

最初に言葉を出したのは10歳ごろの男の子であった

「アヒリタイプレイクで?能力破壊はどこにあるっていうんだ?」

首を傾げて問うその質問に答えたのは赤髪の青年であった

「北海道とか言っていたぜ」

「京都の次は北海道か……」

紫の髪の女が呟いた

「お前たち」

3人に声を掛けたのは長身の体つきのいい男であった

「WAXAはうちら組織がPGMを奪うことは分かっているはず」

ゼオルはフツと小さく笑った

「今回はレウンとコーナにいつてもらう。二人で大丈夫だな？」

「問題ありません。」

小さくコーナはつぶやいた

「二人で十分だ」

力強くレウンが言った

そして固まっていた集団がどんどん散って行った

休みが明けスバルは学校にいった

ミソラはギプスをもう外しており一足早くに学校にいった

そしてスバルはいつも通り学校に来た

そういつも通り

「はあ、はあ、間に合った」

息を切らしながら教室に入ってきたスバルの前にルナが立っていた

「遅刻よ。残念ながら」

ミソラは遠目でスバルの方を見てクスクス笑っていた

「よしHR始めるぞ」

ドアを開けて中に入ってきた育田先生

「えー今日はこの時期には珍しいが転校生が来ている」

するとクラスがざわついた

「この時期に転校生？」

これはざわつきの一言

「こんな時期にめずらしいわね」

「ほんと、なんか知っていそうな人が来るような」

「それって私のこと？」

ミソラが笑顔で聞いた

しかしスバルは曖昧な微笑で受け流した

<スバル、お前が言ったことあながち間違いないねえ>

突然ウォーロックがしゃべってきた

「え？どういうこと？」

<昨日のあいつの電波を感じるあいつは・・・>

ウォーロックが言おうとしたその瞬間

ドアが開き二人の男女が入ってきた

その顔はスバルたちが知っている顔であった

「西蓮寺ハルトです」

「鳴無ミオです」

「「よろしくお願いします」」

二人そろって挨拶をした教室内からは驚きの声が上がった（おもに男子）

「かわいくね！？ミソラちゃんと同じくらいだな」

男子が主に声を上げていた

そして二人は育田先生に誘導され席に着いた

二人の席はスバルとミソラの後ろであつた

「よろしくねスバル君」

「まさか転校してくるなんて」

スバルが驚きの声を上げる

<びつくりしたでしょ>

<けっ、まさかとは思つたがやっぱりお前らか>

ウォーロックがため息交じりに言つた

そしてHRが終わり授業の準備に移つた

「二人は知り合いだったのね」

ルナが歩み寄ってきて話した

「まあ、昨日WAXAで・・・」

「でも一つのクラスに三人も転校生が来て大丈夫かな？」



ミソラが首を傾げその質問にキザマロが答えた

「ジャック君やツカサ君がいないからしいです」

「さて準備でもしましょうか」

ルナはそういうと自分の席に戻った

「そうそう、スバル君放課後屋上に来てほしいんだけど」

「別にいいけど……」

「じゃあ放課後ね」

ハルトはそういうと授業の準備をした

スバルは何の話かめどがつかなかった

## また転校生（後書き）

無理やりですいません・・・  
一応戦いに合わせられるようにミソラのギブスは外しました  
また転校生・・・もうだしませんよ

## 模擬戦（前書き）

最近自分でも話の流れがつかめません

## 模擬戦

（放課後）

スバルはハルトに言われた通り屋上に向かった

<このパターンどつかであつたような・・・>

階段を歩いているスバルにウォーロックが話しかけた

屋上へ着くとハルトの姿はなかった

「どこにもいないね」

<ウィルスの気配はないけどな>

「縁起でもないこと言わないでよ」

すると屋上のエレベーターが開いた中にいたのはハルトとミオだった

「ごめん遅くなって」

「いいよ別に。で、話って何？」

スバルはすぐさま本題へと移り変わった

「実は今朝シドウさんから話があつてグローカーが動き出す前に  
お互いの力を比べあつたらどうだっていうから」

<腕試しって言う事か>

ウォーロックが腕を振り回しながら言った

「うゝゝん、確かにお互いの電波化した姿見たことないし特訓も兼ねてって言う事なら」

スバルは同意した

「じゃあ審判は私がやるわ」

「ルールはこの屋上のウェーブロードとその周辺」

<やってやるうじゃねえか>

「トランスコード003、シューティングスターロックマン!!」

「トランスコード#? スコルピオ・カイザー!!」

電波化した二人はウェーブロードを駆け抜けた

「あれ?どこいったんだろう」

ミソラは教室からスバルがいなくなって探していた

校内のあちこちを探しているがスバルの姿はどこにもない

「この展開前にあったような……」

しびしび思い出すミソラ

<屋上にウォーロックの電波を感じるわ>

「ほんとー!」

ミソラはハーブに言われた通り屋上へいった

しかし屋上に行ってもスバルの姿は見当たらずミオの姿しかなかった

「あれ?ミソラちゃんどうしたの?」

空を見上げていたミオは気づき声を掛けた

「スバル君探しているんだけど知らない?」

「ああ、二人ならあそこ」

ミソラはミオの指差した方向に目をやった空では火花が散っていた

<ハルトと戦っているのね>

「ええ、そうよ」

「でもなんでいきなり?」

<お互いの力を試したいからよ>

アクアスが言った

「私は審判だから今ここにいるの。ミソラ茶ちゃんも見ていく?」

「うゝゝん、どうせ暇だから見ていこ」

ミソラはミオと一緒に観戦していった

ゝゝスバル・ハルトサイドゝゝ

電波変換したハルトの姿はスコルピによく似た装甲<sup>アーマー</sup>を身にまとっていた

「あれがスコルピオ・カイザー」

<さすがFM星人のデータが入っている人工電波生命体だぜ>

ウェーブロード上は閑散としていて二人の間からは気合というか何らかの空気が漂っていた

「さて、はじめようか。スバル君・・・じゃなくてロックマン」

たかが模擬戦という物だろうがハルトの目は真剣であった

スバルも体勢を取った

「いくよ!!」

二人は力強く地面を蹴りあげ早々と攻撃を繰り出す

二人は互角と言えるほどの力だった

「やるね」

攻撃がやみ息を整える二人だがロックマンは次も攻撃を出した

「バトルカード。エアスプレッドX!!」

銃弾がカイザーを襲った

アイスサイズ  
「氷結鎌!!」

しかし鎌を取出しすぐさま氷の波を出して薙ぎ払った

「やるじゃねえか・・・」

「バトルカード、エドギリブレード3!!」

アイススラッシュ  
「氷輪斬!!」

ぶつかり合った攻撃その間から蒸気が出てきた

「強い・・・」

「スバル君こそ・・・」

二人は息を切らしていた

「ハルト、これしきでくたばるな」



スコルピが出てきていった

<スバル！！まだ始まったばかりだぞ！！もっとシャキツとしろ>

ウォーロックもスバルに喝を入れた二人は立ち上がり再び戦闘体勢バトルモードに入った

「バトルカード、ソード、ワイドソード、ロングソード、GAギャラクシーアドバンス

ジャイアントアックス！！」

ギャラクシーアドバンス  
GAを発動させたロックマンは大きく剣を振りかぶり

切り掛かった

「うおおおおおおおおおおお！！」

「ならばこつちも！！」

カイザーも鎌を大きく振りかぶった

ザ・ブリザード  
「爆氷波！！」

また爆発が起こった

二人はまだ立っており倒れる気配は全くなかった

<やるじゃねえか>

<そちらこそ>

するとハンターから通信が入った

『二人ともそこでおしまいよ』

相手はミオであつたそして電話越しにミソラの姿があつた

<まだやれるぞ!!>

ウォーロックは意地を張り腕を振り回した

「ウォーロックいい加減やめよう」

スバルは力の抜けた声で言った

「僕も疲れた」

<ハルト何も言っている!!まだ時間はあるぞ!!>

<スバル早く立て!!やるぞ!!>

いい加減うるさいと感じた二人は強制的にウィザードオフされ

ウェーブアウトした

## 準備（前書き）

すいません文化祭明けでなかなか更新できずに・・・

## 準備

現実世界に戻ったスバルとハルトは疲れでその場に倒れこんだ

「はいハルト」

ミオはハルトに水を差しだした

それに続いてミソラもスバルに水を差しだした

「ありがとうミソラちゃん……ってミソラちゃん!？」

スバルはミソラが屋上にいることに驚いた

「なに？私がここにいと何かまずかった？」

「いや……なんでここにいるのかなって……」

スバルは疑惑と共に疑問に感じた

「いや、スバル君と一緒に帰ろうとしたら教室にどこにもいなくて探していたら

ここにいたから」

ミソラは今までの経緯を説明した

「で、どうだった？」

ミオはさりげなく模擬戦のことを聞いたハルトは一息ついて言った

「簡単に言つと互角」

<もつと時間があれば結果は分らなかったけどな>

スコルピが負け惜しみの様な事を言った

ハルトとスバルは空を見上げた時間帯はもう夕暮れ近い下校時間も近い

「そろそろ帰るか」

スバルが立ち上がりミソラと共に屋上を出ようとしたがハルトに呼び止められた

「そうだスバル君」

「何？」

「ミソラちゃんもだけど明日WAXAに来てね」

「え？いきなり？でも明日学校だよ」

首を傾げるスバルミソラも横で頷いていた

「大丈夫だよ学校には連絡をつけておくらしいから」

スバルはハルトの言葉に少し変な疑問を感じた

だがそんなことは気にしなかった

「とりあえず今日は帰ろうか」

改めてスバルたちは屋上を出て行った

「疲れたな〜」

帰り道ミオと並んで歩いていたハルトは大きく伸びをした

「転校初日ってこんなに疲れるんか」

するとミオはハルトに抱き着いた

「ミオ!？」

突然の行動にどう対処すればいいのかわからなかった

「いいじゃん。宿舎に着くまでこうしていたい」

力強く言ったミオにハルトはやれやれという顔をするしかなかった

夕日がともす二人の影は何処までも伸びていった

一歩スバル達も帰っている途中であった

「北海道か」



すると光に包まれレウンとコーナの姿はなかった

「邪魔はさえんぞ・・・WAXA」

家に着いたスバルとミソラはすぐに夕ご飯を食べた

しばらくして久しぶりに帰宅した大吾が帰ってきた

「おかえり、父さん」

「ただいま。おや？お客さんか？」

大吾がミソラの方を見て言うとかかねが大吾に歩み寄り耳打ちした

「ほうそうかー」

大吾も納得したようで席に着きスバル達と一緒に食事をとった

「そういえば母さん、明日WAXAに用事ができちゃって明日学校を休まないと行けないんだけど」

不意に放課後ハルトに言われたことを思い出した

「あらそういえば今日晧さんが家に来てそう言っていたわね。いいよ先生にはいつておくから」

「ありがとう」



二人は皿の上のものをすべて食べ尽くし片付けた後それぞれの部屋へといった

「成長したなスバル」

「ほんと、あなたそっくり」

大吾とあかねはいつまでもスバルとミソラの背中を見守り続けるのであった

「え〜〜と明日は7時に起きなきゃ」

目覚まし時計をいじっているスバルその横にウォーロックが入ってきた

<そんな早い時間に起きられるか？>

ウォーロックが聞くとスバルはムツとした顔で振り返った

聞くところによると明日は寝坊してはいけないほど大事なことがあるらしい

目覚ましをセットし終えたスバルは明日必要なものは何か確認した

「これでよし」と

一通り終わり一息ついたそしてハンターを開きヨイリーからもらったキズナを眺めた

ウォーロックは何か言いたそうだった。がずっとスバルの方を見ていた。

「キズナで能力を発揮するPGM」

ぼそっとつぶやきスバルはベッドに入った。

## 準備（後書き）

疲れました・・・三日間の投稿・・・

次から新章突入です

出勤（前書き）

更新できずすいません

## 出勤

目覚ましにセットした通りの時刻に起床したスバルは着替えて一階へと向かった

一回には既にミソラが朝食をとっていた

いつものあいさつを交わしスバルもお皿の上ののってあったパンに齧り付いた

今日の集合時間は7時30分残り20分の時間をスバルとミソラは呑気に過ごしている

余裕はない

支度を終え玄関を出ようとした

「じゃあ行ってくるね」

「行ってきます」

「気を付けてね」

二人は家を出た

「そういえばルナちゃん達には言っていなかったよね」

駅に向かいながらミソラが聞いてきた

< いいじゃねえか。ゴン太の方で何とかするだろ >

二人はウェーブライナーにのりWAXAへと向かった

時刻は7時25分予定の時間より5分前に着いた

研究室に入るとハルト、ミオ、ジャック、ゴン太の4人がいた

そしてヨイリーとシドウも入ってきた

「時間通り……さて……」

シドウは一つ咳払いをして喋った

「朝早くから集まってもらい急で悪いんだが……昨日グローカーが動き出した

急遽スバル、ミソラ、ハルト、ミオには北海道に出動してもらう」

「え!!」

スバルはびっくりして声を上げてしまった

しかしビックリしたのはスバルだけじゃなかったほかのみんなも目を丸くしていた

< へ、いいじゃねえか腕が鈍ると戦えなくなっちまうからな >

「でも俺たちはどうすればいいんだ？」

今回任務に参加しないジャックとゴン太はすることがない

「念の為此にいてもらうほかの奴らが来るかもしれない」

そしてシドウは任務に行く4人の方へと向き直った

「お前たち準備はいいか？」

「「「はい！」「」「」」

最初シドウの言葉に疑問を感じていたがやると決まった以上スイッチを入れた

そして4人は奥の部屋へと連れて行かれた

連れて行かれた場所は名の変哲のない部屋しかし中央に大きな輪っかが付いている装置があった

「ここはワイプルーム。本来コスモウェーブを使って欲しいけどウェーブステーションが

アヒリタイプブレイク  
能力破壊でやられているかもしれない。今回は

これを使って北海道のスノータウンに行つて欲しい」

4人は頷きワイプ装置にのった

「じゃあ起動するぞ」

スイッチを押すと大きな輪が4人を包み込み光をまとい消えた

「頑張ってくれ」

数分後4人は北海道の地へと踏み入れた現在の北海道も冬の余韻が残っている

「ここに能力破壊が」  
アビリティブレイク

遺跡の方向を見たハルトが言った

＜遺跡からかなり危ない電波が放たれているわ＞

「ひとまずここは安易に近づかないで情報収集とかしてみましょう」  
道を歩きだし人手のいるところを探し出した

すぐそこに町が見えその通りに一人の男性が歩いていくのが見えた  
ミソラはその男性に話しかけた

「すいません、向こうの街ってスノータウンですか？」

「そうだけど・・・スノータウンにようでも？」

「スノータウンの遺跡にようがあるんです」

するとスバルの言葉に男性は表情を強ばらせた

何かに怯えているような感じだった



「悪いことは言わねえ……あの遺跡には近づかねえほうがいい・  
・」

あそこには化け物がいる……」

「化け物？」

スバル達はその言葉に首を傾げた

「あの化け物というのは……」

「あの遺跡は古くから伝わっていてそこを守っているウィザードア  
クイラが突然

おかしくなっちまったんだよ普段はおとなしいのにいきなりどう猛  
になって

そのせいで町全体の電子機器ウィザードの本来の能力が使い物にな  
らなくなっただよ

男性の説明に4人は能力破壊だという事はすぐにわかった  
アヒリタイプレイク

「その遺跡には今中には入れますか？」

「入れねえって言う事はねえが近づくと危ねえぞ　でかい球体を待  
ちに投げつけて

電子機器を使用不能にしちまったからな」

「そうですか・・・ありがとうございます」

男性に一礼し再び歩き出したスバルたち町に着くとさっき言った通り町全体の電子機器は機能しておらず一人もいなかった

<電波はまだ残っているけど機器自体全く動いていないわね>

「能力を破壊するPGM・・・ちよつと電波変換できる私たちには危ないわね」

ミオとアクアスが言った

<確かに話によるとウィザードの能力も発揮できなくなつたって言つてたわね>

ハーブが確信したように言った

「とにかく遺跡へ向かおう」

スバルの一声で遺跡へと直進した

その頃グローカーのレウンとコーナはウェーブロードの上にいた

「ここね」

ぼそりと彼女はつぶやいた 彼女の姿は背中に剣を二本背負っている

「中から危ない電波を感じるぜ」

レウンが返答した彼の姿は背中にいくつかのアンテナのようなものが  
背中で浮いていた

「これはひとまず様子を見ておいたほうがよさそうね」

「なんでだ？」

コーナの言葉にレウンは首を傾げた

「私たちが今いくとロックマンが邪魔をしに来るわ。それにあのウ  
イザードにも興味があるの」

言い切った言葉にレウンは頷くだけだった

## V S 能力破壊者（前書き）

さぼっていません

## V S 能力破壊者

静まり返った街を後にし遺跡へと向かったスバルたちは入り口付近で立ち止まった

<この中からやばい電波を感じる>

「とりあえず準備はここでした方がよさそうね」

<ウィザードの電波ではない・・・>

それぞれの言葉に頷きそれぞれ準備した

「ウォーロック行くよー!!」

<じゃあー!!ひと暴れするぜー!!>

四人はハンターを掲げた

「トランスコード!!」「」

「シューティングスターロックマン!!」

「004、ハープ・ノート!!」

「#?、スコルピオ・カイザー!!」

「#、アクアス・ネプチューン!!」

電波変換した四人は遺跡の中へと入って行った

遺跡の中は広く迷子になりそうなほどだった

<この先からやばい電波を感じるぜ>

ウォーロックがいいスバルたちは広い場所に出た

「誰もいないわね」

<たしかに電波は感じたわ>

四人が辺りを見まわしているとウォーロックの体がピクリと動いた

<上だ!!>

突然の叫びに反応したスバルは上を見ると上空から何かが迫ってきた

危険を察知したのか早めに避けると迫ってきたものは地面に落ち

ひび割れた場所に立っていた

「お前………何者だ!!」

<私の名は……アクイラ……この遺跡の守り主だ>

アクイラと名乗ったウィザードは全身黒く羽のようなものが付いていた

「アクイラ………この町の電子機器を機能停止にした奴か」

<ふん。愚かな人間どもがたかがそんなことをしただけで騒ぐとは>  
勝ち誇ったようにアキラは言ってみせた

「なぜこんなことするー!」

<簡単なことだ・・・人間はおろか・・・ウィザードを道具として扱い

自分だけ満足するようなことをしている>

<それは違うな>

突然ウォーロックがしゃべりだした

今ウォーロックの目は真剣だった 戦いの時とは違う目であった

<人間がウィザードを道具として扱う・・・それはお前の思っていることとは

違いお互いの信頼関係を築くためにあるんだ 人間自分だけが満足するなどあり得ない>

「ウォーロック・・・・・・・・・・」

<ふん。端くれが。貴様に私の過去など知らない癖して>

「過去？」

<私は2か月前までは主人がいたそれはとっても親切な主人であった

働くときも一緒飯を食う時も一緒……いつでも一緒だった

しかし！！彼は突然私を捨てた新しいワイザードができたのだ

それ以来私は人間を憎みここに迷い込んだ

そして見つけたのが凄まじい力を持つPGMだった>

アヒリティフレイク  
「能力破壊………」

ミオがぼそつと呟いた

<愚かな人間どもは電子機器がなければ生きていけない私は

それを機能停止させる能力を手に入れたのだ>  
アヒリティ

「そんなことのために………」

スバルは拳を握りしめた

<お前が何をしでかすかはどうだっていいが人とワイザードの絆を  
否定するのは許せねえ>

<絆等薄汚いものなどには興味がない>

「アクイラ！！今すぐ勝負だ！！」

スバルが対戦を申し込んだ



アキラはフツと笑って言った

「勝てないと分かっているけどやるのか……」

「スバル君、僕も」

ハルトが応援を頼もうとしたがスバルは首を横に振った

「ここは僕がやるみんなはグローカーが来るかもしれないから見張ってて」

「ここはスバル君に任せましょう」

三人は遺跡から出た

「こい、愚かな人間どもが」

「ウェーブバトル、ライド・オン!!」

## V S 能力破壊者へ接戦へ

「スバル君大丈夫かな？」

遺跡から少し離れたミソラ達はアクイラと戦っているスバルが心配だった

<あの二人ならだいじょだよ>

ハーブが元気づけた

「今は僕たちができることをしよう」

「そうだね……………」

一方スバルたちはアクイラとの戦闘を開始していた

<いくぜ!!>

<来い…………>

「バトルカード、ワイドソード!!」

ロックマンは右手から剣をだしアクイラに切り掛かった

フライングウェーブ  
<飛翔波!!!>

ロックマンが振り下ろした剣をアクイラは技を使って止めた

<どうした？まだ来ないのか？>

「くっ、バトルカード、エドギリブレードX!!」

<ならばこっちも・・・クローブレード!!>

アクイラは左手から剣をだしロックマンに向かって走り出した

両者の剣がぶつかり合いぎちぎちという音を立てている

最初は互角に見えたが次第にアクイラの方の力が強まった

「押される・・・」

フライングウェーブ  
<飛翔波!!>

ロックマンは衝撃波を食らい下に落ちて行った

「うわぁ!!」

壁にぶつかったロックマンは少しよろめいている状態だった

<ちっ、さすがにPGMを取り込んでいる奴の力は半端じゃないな>

「でもなんでPGMなんか・・・」

<さあな、説明している暇はねえようだ。来るぞ!!>

上を見上げると猛スピードでアクイラがロックマンの方向へ向かっていった

ロックマンはそれを何とか避けきった

「このままじゃ相手のペースになっちゃう・・・」

スバルは何かないか考えていた

そのころミソラ達はグローカーが来ないか遺跡の周りを見まわっていた

それに気づいたコーナとレウンはすぐさま行動に移り変わった

「レウン行くぞー!!」

「はいよ」

電波変換した二人はミソラ達の方へ直進した

レウンの電波変換した姿は背中に大きなルーレットの様なものを背負っており

体は黄色と灰色だった

コーナは背中に日本の刀を装備しており髪の毛と同じ色の装甲をまアイマとっていた

その二人がそっちに向かっていると殺気づいたハルトは振り返った

目の前には刀を取り出したコーナの姿がありハルトはすぐさま鎌でガードした

おなじくレウンもミオとミソラに攻撃を仕掛けた

「お前らグローカーか!!」

「ええ・・・そうよ私たちはグローカー。私の名は・・・コーナ・  
・」

そしてこの姿はグラビティ・ソルジャー」

「お前らは能力破壊が目当てだろ!？」  
アビリティブレイク

「だからどうした?」

「ハルト!!」

突然カイザーの後ろに回っていたレウン・エレキ・ディザーは手から電撃を出した

「ぐはあ!!!!」

ウォーターネット  
「水網波!!」

ネプチューンはランプペットを取出し音色を出すと水の網が現れカイザーのクッションになった

「じゃましやがって・・・雷撃柱!!」  
サンダーウオール

ウェーブロード上に雷の柱を叩き込みネプチューンに向かって繰り出された

「ミオちゃん!! ショックノート!!」

ハープノートが攻撃を封じた

「ちっ、姉ちゃんその鎌を背負った奴俺にやらせてくれ」

「好きにしないで」

「こっちだ!!」

カイザーは言われるまま場所を移した

「さて……私はこの子らを片付けないといけないようだね」

「来るよ……」

<二人とも気をつけなさい。あいつはとんでもない奴だわ>

「わかった……」

「ウェーブバトル、ライド・オン!!」

「八裂きにしてあげるわ」

**V S 能力破壊者ゝ接戦ゝ（後書き）**

**急な場面転換ですいません**

**V S 能力破壊者 〱 苦痛 〱 (前書き)**

お待たせしました 一週間? 期間はよく分からないですけど  
待たせてすみません



VS能力破壊者　く苦痛く

ミソラ達がグローカーと戦っていたその頃のスバルはアクイラと激しい戦いを繰り広げていた

「マッドバルカン!!」

<クローショット!!>

力にそれほど差は見られなかったが明らかにロックマンの方の息切れが早かった

<どうした、もう終わりか?>

余裕の表情を見せるアクイラその顔から笑みがこぼれた

「お前の・・・好きにはさせない」

<いくら足掻いた所で何の得も得れん。飛翔波!!<sup>フライングウェーブ</sup>!!」

攻撃を食らい壁にぶつかったロックマンはもう立ち上がる力さえ残っていないかった

<スバル、しっかりしやがれ!!>

ウォーロックに言われ立ち上がろうとするがその場に崩れてしまった

<これでおしまいだ・・・クローブレード!!>

アクイラは展開された剣を振り下ろした

しかし剣はロックマンの目の前で止められていた

<なに！？>

ウォーロックは剣を受け止めていた

<スバル．．．．お前は一人じゃない．．．

今までの戦いはお前一人じゃ勝てないほどの戦いがいくつかあった．  
．．．>

「ウォーロック．．．．」

<綺麗ごとを．．．．．>

『そうだ．．．僕は一人じゃない．．．．．みんながいる！！』

（（キズナ<sup>パワー</sup>力感知。上昇中．．．．84％．．．92％．．．100％

キズナ 起動します）

「うおおおおおおおおおおおおおおおお  
！！」

<なんだ！？．．．．．>

光に包まれたロックマン 現れた姿は以前PGMを見つけた遺跡で暴走した姿だった

「いくよ!!」

「かかってきなさい」

一方ミソラとミオはグラビティ・ソルジャーと対立していた

ウォーターボイス  
「水音撃!!」

ミオはトランペットを吹き波を出したそれに向かったソルジャーは簡単に切り裂いた

「ショックノート!!」

続いてコンポをだし音波を出したハーブ・ノート

だが音波も簡単に避けられてしまった

「……そい」

「え？」

「遅すぎる……」

そしてソルジャーは姿を消した

「どこ行つたの？」

<電波を感じ取れない・・・・・・・・>

「ミオちゃん上!!」

「え？」

ミオは上を見上げるとそこには剣を構えているソルジャーの姿が映し出された

グラビティ・アーツ  
「重力刃!!」

攻撃をくらったネプチューンは体が動かない状態になっていた

「体が・・・動かない」

<・・・・・・・・ミオ>

「よそ見をするな」

ソルジャーはハープノートに攻撃を加えた

だがハープノートは間一髪で攻撃を食い止めた

「少しは骨があるな」

「よくも・・・」

<ミソヲ集中しなさい>

「ショックノート!!」

エイトスラッシュ  
「八斬剣!!」

攻撃がぶつかり合ったがハーブ・ノートとソルジャーの距離は遠ざかった

「マシンガンストリング!!」

「!!」

ギターから弦をだし音色を出すとソルジャーは麻痺した

そして麻痺したところに会心の一撃を入れた

「タイボクザン!!」

V S能力破壊者 〽苦痛〽 (後書き)

変なところで終わってしまいました・・・

V S 能力破壊者 〱 空中戦 〱 (前書き)

遅くの更新です

## V S 能力破壊者 〱 空中戦

まだ微かに冬の余韻が残る北海道の地では三つの戦いが広がっていた

一つはロックマンとアクイラによるP G M破壊戦

二つ目はハープ・ノート、アクアス・ネプチューンとグラビティ・ソルジャー

による地上戦そして三つ目は……

アイスサイズ  
「氷結鎌!!」

スパークリング  
「電光輪!!」

スコルピオ・カイザーとエレキ・ディザーによる空中戦だった

空中戦といえどもウェーブロード上で戦っていた

＜属性はこちらが不利だがここは有利にするぞ＞

スコルピの言葉にハルトは頷いた

スパークネイル  
「なにが有利にするだ!! 電流爪!!」

電流をまとった爪を剥き出し襲い掛かった

アイススラッシュ  
「氷輪斬!!」



ぎりぎりまでひきつけ攻撃をはじめた

「へっ、なかなかやるじゃねえか」

苦笑するディザーカイザーはその隙を狙おうとしたがどこにもいなかった

「お前との遊びはこれでおしまいだ!!」

「!？」

<ハルト!!！>

ディザーはカイザーの後ろに立ちルーレットの様なものを目の前に出した

「これでおしまいだ!!電滅波・流電砲!!」  
サンダーアビスフレイク

発射された電撃砲にカイザーは直撃した

「うあああああああ!!」

電撃を大量に浴びたハルトの体から電技気が放出され動ける状態ではなかった

「思った以上に時間を食っちゃったな 姉ちゃんまだやってるかな」  
そう思いながら倒れているカイザーに背を向けた

「あれ？おれなにしてた？」

ハルトが起きると辺りは真っ暗だった

<ハルト・・・・・・・・>

スコルピが目の前にあらわれた

「スコルピ・・・・・・・・俺は何してた？」

<俺もよく分からん・・・・けど>

「けど？」

<ここは俺達が居てはいけないような場所だろう>

ハルトはスコルピの言っていることが理解できなかった

「どういう意味？」

<お前はまだ死んではいけない・・・・・・・・>

「俺はまだ死んではいけない・・・・・・・・」

ハルトは自分の右手の掌を見た

<俺たちが最初にダウンするとあの二人が厄介ことになるぞ>

少し笑顔でスコルピが言った

「・・・・・・・・・・そうか」

あいつらというのはミオとアクアスのことだろう

ハルトは上を見上げた

「まだ終わってねえぞ!!」

カイザーはむくりと起きた

「な!!お前・・・・あれを食らって」

「それでも俺はタフだ」

カイザーは足元に置いてあつた鎌を持った

「スコルピ・・・・・・・・リミットリリース限界解除・・・・・・・・」

<ふ~~~~、そうつと思つたよ>

呆れるようにスコルピはため息をついた

「何ぶつぶつ言ってやがる!!」

ディザーが文句をかましているのもお構いなしにハルトは呪文のよ  
うなものを唱えた

「失われし星座の力よ蠍座の宮に限界の解除を申す……」

目をつむり呪文のような言葉を継ぐカイザー

「なんだ？死ぬ前に何かのおまじないか？大丈夫楽に死ねるさ！！」

再び背中の中のルーレットのを目の前に出した

グランドサンダー  
「激雷砲！！」

リミットリリース  
「限界解除！！」

カイザーを包み込んだ光とディザーが放った技は同時に繰り出された

V S能力破壊者 氷づけ (前書き)

すいません更新をおおいにサボってしまい (殴  
腕が落ちていないかどうか心配です

## V S 能力破壊者 く氷づけ

<・・・なんだ、その姿は!?!>

アクイラが見た姿は恐竜の姿をしたロックマンだった

「・・・これが・・・エクストロージョン鬼神化・・・」

スバルは自分の姿に感嘆を上げた

紫の装甲をまとい閉じたままの翼、両手にはめられた鋭い爪アーマー

まさしくサイバードラゴン電腦竜の様な容姿だった

<ただ姿が変わっただけで・・・クロード!!!>

アクイラは剣をだしロックマンに襲い掛かったがロックマンは動こうとしなかった

剣先が触れようとしたその時ロックマンは鋭い爪で食い止めた

「・・・動きが見える」

<さっきまでの動きとは違う・・・>

「アイスクロー氷輪刃!!」

爪から繰り出された氷の攻撃はアクイラに命中した

あまりの威力に吹き飛ばされた距離が大きかった

<くっ・・・・・・・・>

「これが鬼神化（エクスプロージョンの力」

<全くだ・・・・・・・・これはすごいな>

ウォーロックが感心しているがアクイラはもう突進してきた

クロスエンドブレード  
<十字終焉斬！！>

クリスタルブレード  
「氷冬斬！！」

攻撃がぶつかり合うかと思ったがアクイラは姿をけしロックマンの後ろに回った

<終わりだ！！>

剣をかざしたがロックマンも姿を消した

上を見上げるとロックマンは上にいた

<そこか！！>

アクイラは猛スピードで駆けるとロックマンは遺跡内から出た

出た場所は遺跡の上空だった

<・・・・・・・・空の戦いは俺の方が有利だ>

勝ち誇ったようにアクイラは笑った

<へっ、だからどうした>

ロックマンも電波を帯びた翼を展開していた

「一気に決めるぞ!!」

ブラックツインスラッシュ  
<黒龍双斬!!>

黒いオーラがでる剣を出し切り掛かった

ロックマンは右手から水色の球体をだし周りを包み込んだ

それはまるでBEギヤラクシーのようだった

フリーズエンド  
「FEギヤラクシー!!」

包み込んだ球体を切り裂くと周りが氷で覆われた

「.....勝った」

アクイラは完全に氷づけになり氷も完全に凍っていた

<さて.....この後どうする?、こいつごと破壊するのか?>

ウォーロックの質問にスバルは首を横に振った

「それはダメだよ能力破壊を破壊するのは  
アビリティブレイク



いいけどアクイラはダメでしょ」

<じゃあこのままにしておくのか？>

「う〜〜〜〜〜〜ん、それはそれで・・・」

これからアクイラをどうするか考え始めるスバルだった

<やつぱ壊すぞー！>

「だめ！！絶対ダメ！！！！！！」

ウォーロックを必死で止めかかるスバルすでに鬼神化は解けていた

「どうにかPGMを取り出せる方法がないかな？」

考えるスバルにウォーロックはうじうじしていた

V S能力破壊者 氷づけ (後書き)

今回は割と短めです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9213v/>

---

流星のロックマン 4 DualStar

2011年11月3日22時12分発行